

IBM® DB2 Connect™



DB2 Connect™ Personal Edition
概説およびインストール

バージョン 8.2

IBM® DB2 Connect™



DB2 Connect™ Personal Edition
概説およびインストール

バージョン 8.2

ご注意!

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。
<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは
<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GC09-4834-01
IBM® DB2 Connect™
Quick Beginnings for DB2 Connect™ Personal Edition
Version 8.2

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1993-2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

第 1 部 DB2 Connect について 1

第 1 章 DB2 Connect の紹介 3

DB2 Connect の製品オファリング	3
DB2 Connect のシナリオ	6
DB2 Connect Personal Edition を使用したホストま たは iSeries DB2 データへのアクセス	6
構成アシスタントを使用したデータベース接続の管 理	9
DB2 Application Development Client を使用したア プリケーションの開発	10
DB2 Connect Personal Edition のインストールと構成 に必要な標準ステップ	11

第 2 部 計画およびインストール . . . 13

第 2 章 DB2 Connect PE のインストー ル (Windows) 15

インストール要件	15
DB2 Connect Personal Edition のインストール要 件 (Windows)	15
ディスクおよびメモリの要件 (Windows および UNIX)	16
ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)	17
DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー アカウント (Windows)	17
DB2 Connect Personal Edition のインストール (Windows)	21
非管理者による DB2 Connect (Windows) のインス トール	23

第 3 章 DB2 Connect PE のインストー ル (Linux) 25

インストール要件	25
DB2 Connect Personal Edition のインストール要 件 (Linux)	25
ディスクおよびメモリの要件 (Windows および UNIX)	26
DB2 Connect Personal Edition のインストール (Linux)	26

第 3 部 インストール後の作業 31

第 4 章 ユーザー ID の追加 33

DB2ADMNS および DB2USERS ユーザー・グルー プへのユーザー ID の追加	33
--	----

第 4 部 DB2 Connect 通信のための ホストおよび iSeries データベースの 準備 35

第 5 章 DB2 Connect 通信のための DB2 for OS/390 and z/OS データベ ースの準備 37

DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の準備	37
DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成	38
DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の構成 VTAM の構成	41 42

第 6 章 DB2 Connect 通信のための DB2 UDB for iSeries データベースの準 備 47

DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal Database for iSeries の準備	47
---	----

第 7 章 DB2 Connect 通信のための DB2 for VSE and VM データベースの 準備 49

DB2 Connect からの接続のための DB2 for VSE & VM の準備	49
---	----

第 5 部 ホストおよび iSeries デー タベースとの通信のための DB2 Connect の構成 51

第 8 章 ホストおよび iSeries データベ ースとの通信のための DB2 Connect の 構成 53

CA を使用した、ホストまたは iSeries データベ ース・サーバーへの接続の構成	53
構成タスク	54
構成アシスタント (CA) を使用したデータベース 接続の手動による構成	54
プロファイルを使用したデータベース接続の構成	55
ディスクバリーによるデータベース接続の構成	56
構成アシスタントによるデータベース接続のテス ト	58
各自のアプリケーションの実行	58

第 6 部 DB2 Connect を使用するた めの DB2 Run-time Client の構成 . 61

第 9 章 DB2 Connect を使用するための DB2 クライアントの構成 63

構成アシスタント (CA) を使用したクライアント/サーバー間接続の構成	63
構成タスク	64
構成アシスタント (CA) によるデータベース接続の構成	64
プロファイルを使用したデータベース接続の構成	65
ディスカバリーによるデータベース接続の構成	66
データベース接続のテスト	68
クライアントおよびサーバー・プロファイルの使用	68
クライアント・プロファイル	68
構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート	69
構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成	70
プロファイルのエクスポートとインポート	72

第 7 部 付録 73

付録 A. 言語サポート 75

DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)	75
DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)	76
サポートされる DB2 インターフェース言語	76
別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID	77
文字データの変換	78

付録 B. DB2 Universal Database 技術情報 81

DB2 資料およびヘルプ	81
DB2 資料の更新	81
DB2 インフォメーション・センター	82
DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ	84
DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)	87
DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)	90
DB2 インフォメーション・センターの呼び出し	92

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール 94

DB2 インフォメーション・センターでの希望する言語でのトピックの表示	95
DB2 PDF 資料および印刷された資料	95
DB2 の基本情報	96
管理情報	96
アプリケーション開発情報	97
ビジネス・インテリジェンス情報	98
DB2 Connect 情報	98
入門情報	99
チュートリアル情報	99
オプション・コンポーネント情報	100
リリース・ノート	100
PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法	101
DB2 の印刷資料の注文方法	102
DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す	103
コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す	104
コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す	105
コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す	105
DB2 チュートリアル	106
DB2 トラブルシューティング情報	106
アクセス支援	107
キーボードによる入力およびナビゲーション	108
アクセスしやすい表示	108
支援テクノロジーとの互換性	108
アクセスしやすい資料	109
ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム	109
DB2 Universal Database 製品の共通基準認証	111

付録 C. 特記事項 113

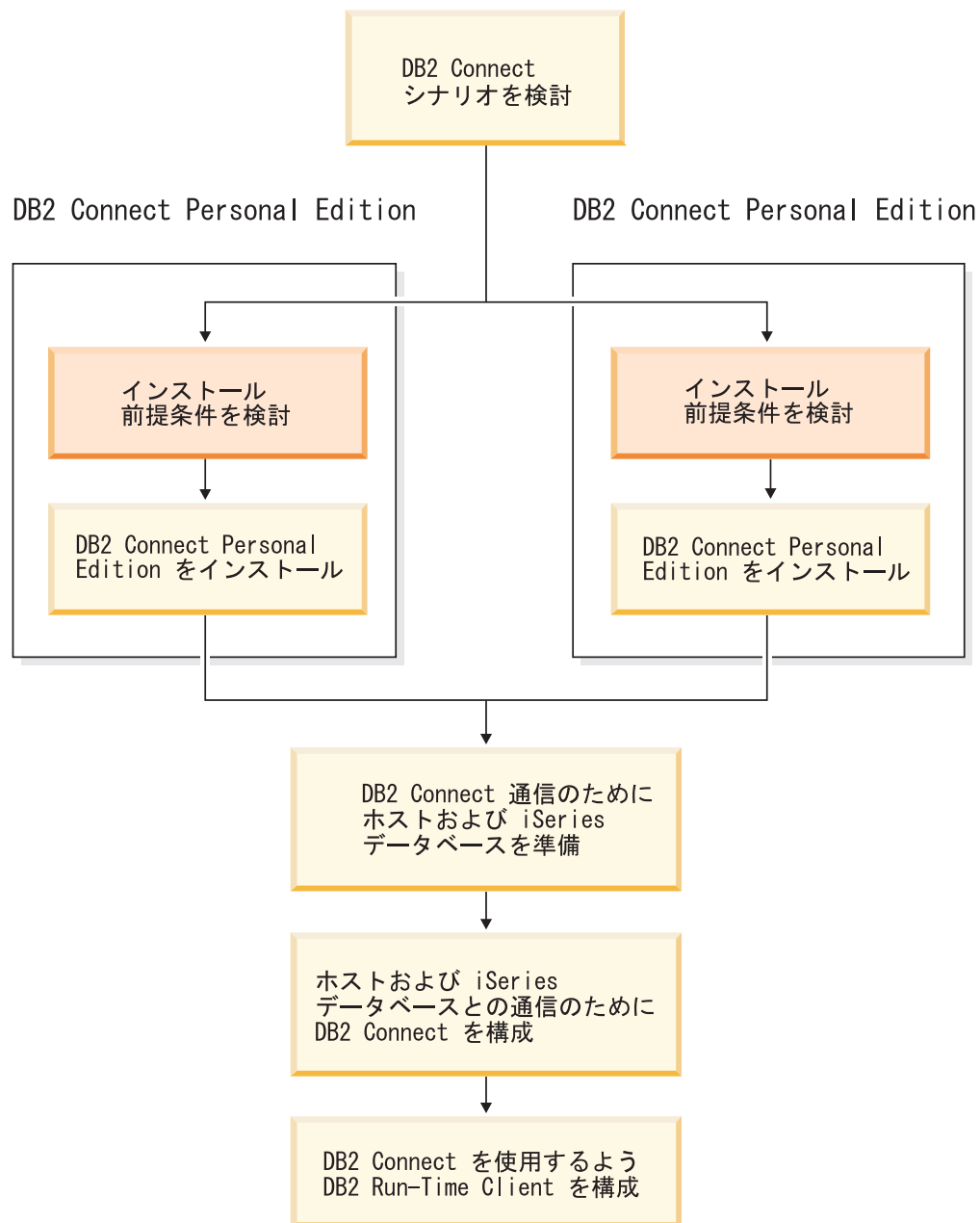
商標	115
--------------	-----

索引 117

IBM と連絡をとる 119

製品情報	119
----------------	-----

第 1 部 DB2 Connect について



第 1 章 DB2 Connect の紹介

DB2 Connect は、Windows および UNIX プラットフォームからメインフレームおよび中型機データベースへの接続性を提供します。 OS/390 and z/OS、iSeries、VSE、および VM 上の DB2 データベースに接続できます。また、分散リレーショナル・データベース体系 (DRDA) に準拠している、IBM 以外のデータベースにも接続できます。

DB2 Connect の製品オファリング

DB2 Connect には、接続に関する複数のソリューションがあります。

DB2 Connect Enterprise Edition

DB2 Connect Enterprise Edition は、複数のデスクトップ・クライアントや Web アプリケーションからホスト・システムや iSeries システムで実行される DB2 サーバーへの接続を集中管理する接続サーバーです。 IBM の DB2 Universal Database (UDB) for iSeries、DB2 for OS/390 and z/OS、および DB2 for VSE & VM などのデータベースは、世界中の大手企業の最重要データを管理するシステムとして最適であり、これからもそのようなシステムとして位置付けられます。しかし、これらのホスト・データベースや iSeries データベースでデータを管理する一方で、そのデータを Windows、UNIX などのワークステーション上で動作するアプリケーションに統合したいという強い要望もあります。

DB2 Connect Enterprise Edition を利用すれば、ローカルおよびリモートのクライアント・アプリケーションで、SQL (構造化照会言語)、DB2 API (アプリケーション・プログラミング・インターフェース)、ODBC (Open Database Connectivity)、JDBC (Java Database Connectivity)、SQLJ (Embedded SQLJ for Java)、DB2 CLI (コール・レベル・インターフェース) を使い、DB2 データベースやホスト・システムの作成、更新、制御、管理を行うことが可能になります。さらに、DB2 Connect は、Microsoft Windows のデータ・インターフェース (ActiveX データ・オブジェクト (ADO)、リモート・データ・オブジェクト (RDO)、オブジェクトのリンクと埋込 (OLE) DB など) もサポートしています。

DB2 Connect Enterprise Edition は現時点で、AIX、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、Windows の各オペレーティング・システムで使用可能です。これらのサーバーは、UNIX (AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境)、および Windows ワークステーション上で動作するアプリケーションをサポートします。

DB2 Connect Enterprise Edition は多くの場合、DB2 クライアントをホストまたは iSeries データベースに接続するために、中間サーバーにインストールされます。さらに、複数のローカル・ユーザーがホスト・サーバーまたは iSeries サーバーに直接アクセスする必要があるマシンでも使われます。

たとえば、DB2 Connect Enterprise Edition は多数のローカル・ユーザーを有する大型マシンにインストールすることができます。さらに、Web サー

バーやトランザクション・プロセッサ (TP) モニターを実行しているマシン、およびローカルの SQL アプリケーション・プロセスやスレッドが複数ある他の 3 層アプリケーション・サーバーにインストールすることもできます。これらのケースでは、システムを単純にしておくため DB2 Connect Enterprise Edition を同一のマシンにインストールすることもできれば、CPU サイクルの負荷を減らすために別個のマシンにインストールすることも可能です。

DB2 Connect Enterprise Edition が最も適しているのは、以下に示すような環境です。

- サーバーがネイティブの TCP/IP 接続をサポートしておらず、デスクトップ・ワークステーションからの SNA を介した直接接続が望ましくない環境。
- Web サーバーが Web ベースのアプリケーションを実行する環境。
- Web サーバーが、データ指向の Java アプリケーションを使った Web ベースのアプリケーションを実行する環境。
- 中間層アプリケーション・サーバーが使われている環境。
- TP モニター (CICS、Encina、Microsoft Transaction Server (MTS)、Tuxedo、Component Broker、MQSeries など) が使われている環境。

DB2 Connect Personal Edition

DB2 Connect Personal Edition は単一のワークステーションからの、サーバー (OS/390、z/OS、OS/400、VM および VSE など) 上に置かれている DB2 データベースへの、または UNIX、および Windows オペレーティング・システム上にある DB2 Universal Database サーバーへのアクセスを提供します。DB2 Connect Personal Edition には DB2 Connect Enterprise Edition と同じ豊富な API セットが用意されています。

この製品は現時点で、Linux および Windows オペレーティング・システムで使用可能です。

DB2 Connect Personal Edition は、Windows オペレーティング・システム、あるいは Linux の単一ワークステーションを、ホスト・データベースまたは iSeries データベースに接続するのに使用します。DB2 Connect Personal Edition が最も適しているのは、ネイティブの TCP/IP サポートが DB2 サーバーによって提供されており、配置するアプリケーションが従来の 2 層クライアント/サーバー・アプリケーションであるような環境です。

たとえば、従来の 2 層から成る VisualBasic および Microsoft Access アプリケーションを利用する場合は DB2 Connect Personal Edition が適しています。アプリケーションが中間層アプリケーション・サーバーを必要とする場合は、DB2 Connect Enterprise Edition を使わなければなりません。

DB2 Connect Unlimited Edition

DB2 Connect Unlimited Edition は、DB2 Connect を柔軟に配置することができ、製品の選択やライセンス入手も簡単に行える、ユニークなパッケージ製品です。この製品には DB2 Connect Personal Edition と DB2 Connect Enterprise Edition の両方が含まれており、ライセンス条件では、任意の

DB2 Connect 製品を無制限に配置できるようになっています。ライセンス料金は、DB2 Connect のユーザーが使用する S/390、あるいは zSeries サーバーの規模に応じて決まります。

このパッケージ製品は、OS/390 および z/OS システム用だけが使用可能です。また、ライセンス供与は DB2 for OS/390 and z/OS のデータ・ソースに対してのみ有効です。

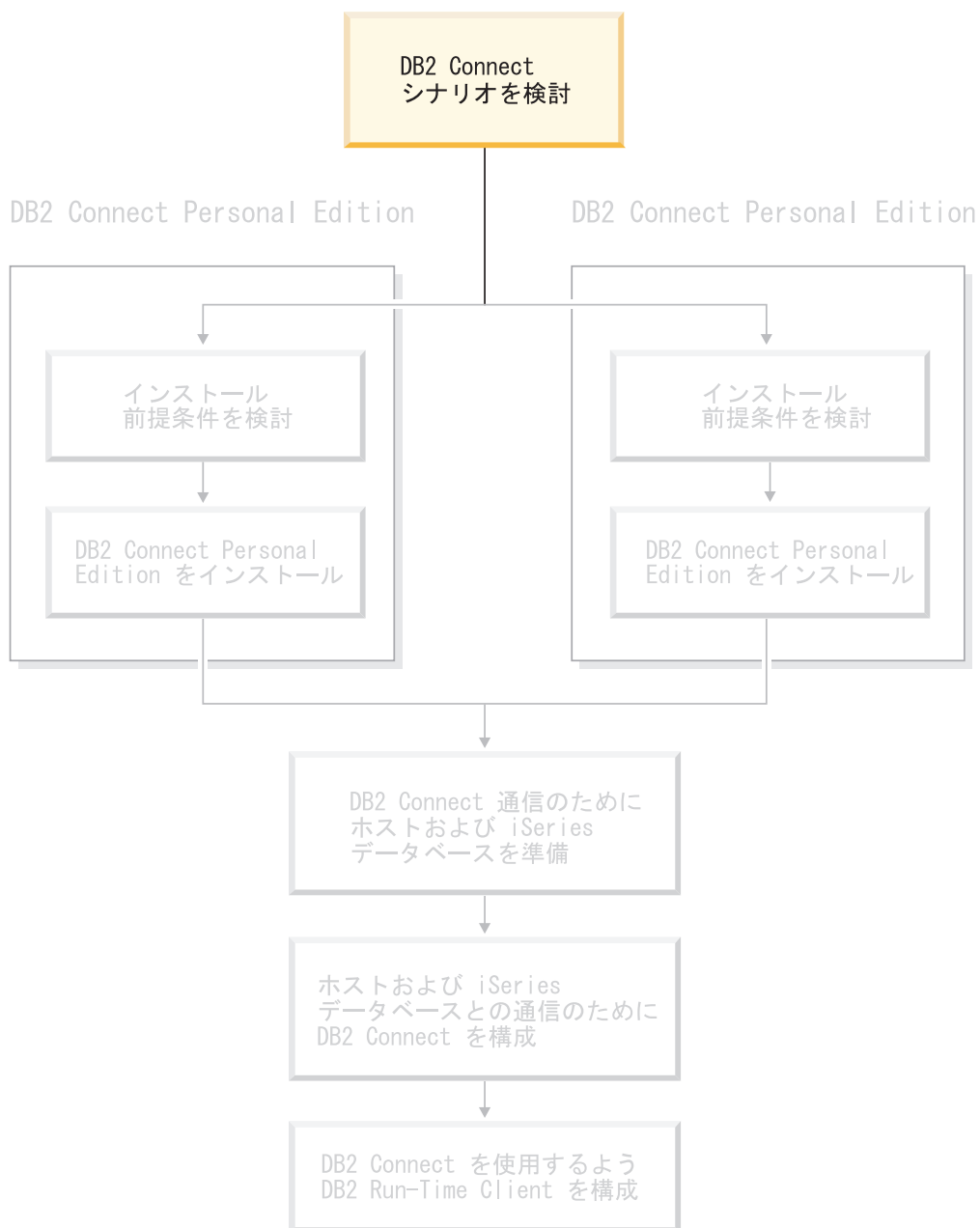
DB2 Connect Application Server Edition

DB2 Connect Application Server Edition は、テクノロジーの面では DB2 Connect Enterprise Server と同一であり、要求の多い大規模な環境に合わせた設計になっています。しかし、ライセンス交付の契約条件は、多層構造のクライアント/サーバー・アプリケーションや、Web テクノロジーを利用したアプリケーションのニーズに特に合わせた内容になっています。

関連タスク:

- 21 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストール (Windows)』
- 26 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストール (Linux)』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Windows)』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Solaris オペレーティング環境)』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Linux)』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (HP-UX)』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (AIX)』

DB2 Connect シナリオ



DB2 Connect Personal Edition を使用したホストまたは iSeries DB2 データへのアクセス

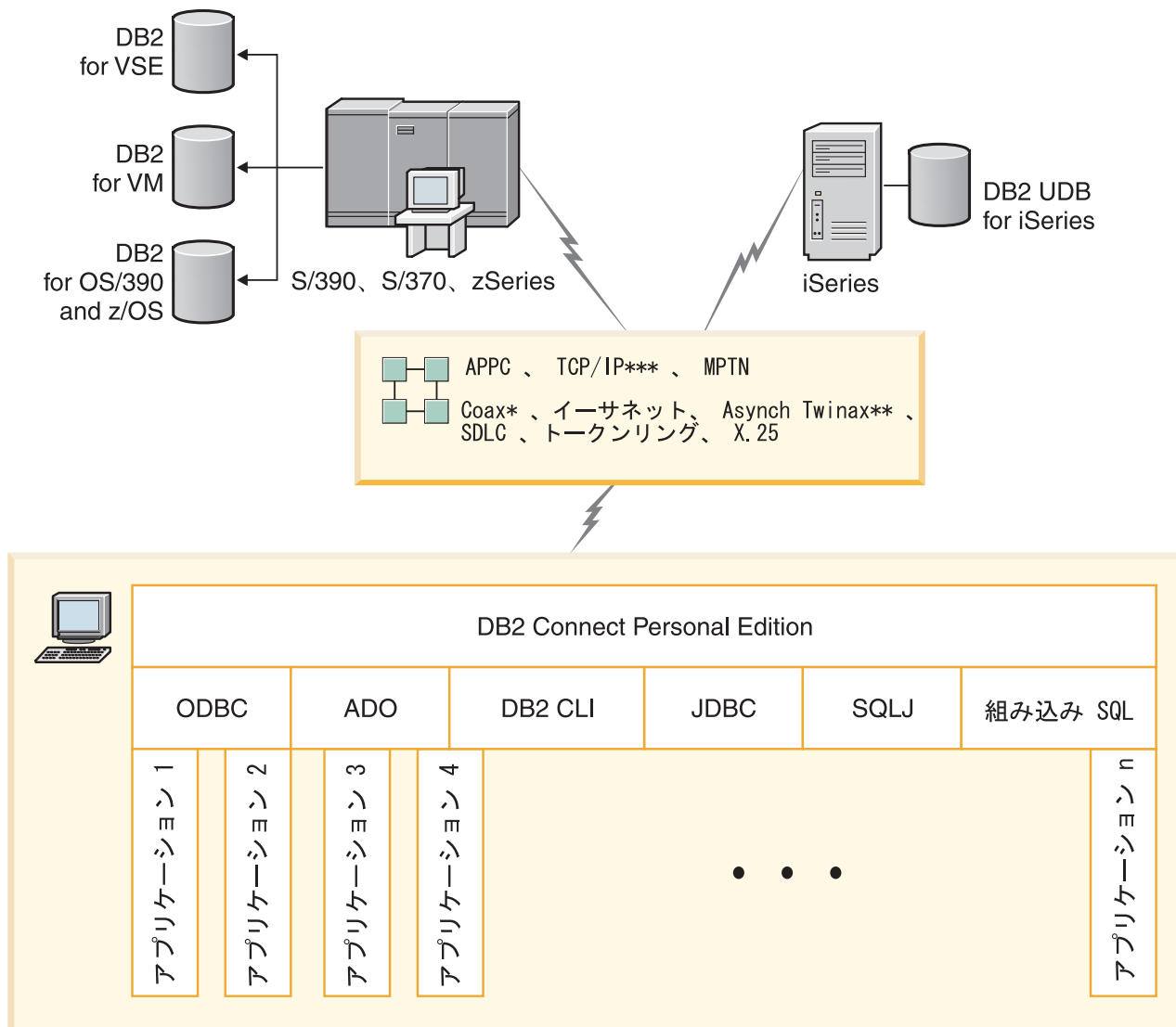
中間サーバーのない直接接続は、非常に便利な望ましい構成です。ホストまたは iSeries™ データベース・サーバーが TCP/IP 接続をサポートする状況下では特にそうです。たとえば、DB2® UDB for OS/390® バージョン 6.1 以降、DB2 UDB for iSeries バージョン 5 リリース 1 以降、または DB2 UDB for VM バージョン 6.1 などが当てはまります。そのような構成では、各 DB2 Connect™ ワークステーションは、DB2 for OS/390 に対する TCP/IP の直接接続を確立するのに対して、統合

SNA サポートを備えたプラットフォームの場合は、他のホストまたは iSeries データベース上の DB2 に APPC を介して接続します。

TCP/IP 接続のためには、ホストまたは iSeries データベースが TCP/IP をサポートしていなければなりません。DB2 UDB for OS/390 バージョン 6.1 以降、DB2 UDB for iSeries バージョン 5 リリース 1 以降、および DB2 Server for VSE & VM バージョン 7 以降が、ネイティブの TCP/IP 接続をサポートしています。ネイティブの TCP/IP の代わりとして MPTN 接続も使用されます。MPTN 接続のためには、IBM® AnyNet® 製品をターゲット・データベース・システムにインストールしなければなりません。ホストまたは iSeries データベースがネイティブの TCP/IP サポートを備えていなくてもかまいません。

| IBM メインフレーム・データベースに接続するには、ライセンス交付を受けた DB2
| Connect 製品か、DB2 Connect コンポーネントを含むライセンス交付を受けた製品
| (たとえば、DB2 Universal Database™ Enterprise Server Edition) が必要です。DB2
| Run-Time Client を使用して IBM メインフレーム・データベースへ接続することは
| できません。

8 ページの図 1 は、DB2 Connect Personal Edition がインストールされ、しかもホストまたは iSeries データベース・サーバーに直接接続されたワークステーションを示しています。



プラットフォームによってはサポートされないプロトコルもあります。

凡例

- * ホスト接続専用
- ** iSeries 用
- *** TCP/IP 接続には DB2 for OS/390 V6 以降、DB2 for iSeries V5R1 以降、または DB2 for VM V6.1 が必要です。

図1. DB2 Connect と、ホストまたは iSeries データベース・サーバーとの直接接続

関連概念:

- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『ホスト・データベースへのダイレクト・アクセス』

構成アシスタントを使用したデータベース接続の管理

構成アシスタント (CA) は、リモート・サーバーへのデータベース接続を管理するのに役立ちます。これは、クライアントからサーバーへの通信をセットアップする望ましい方法です。

コマンド行プロセッサを使用すると、どんなプラットフォームでも、DB2[®] クライアントをセットアップできます。

CA を使用すれば、以下のことを行えます。

- アプリケーションによって使用できるようにデータベースをカタログする。次の 3 通りの方法を使えます。
 - データベース管理者から提供されたプロファイルを使って、接続を自動定義します。そのデータベース用のクライアント・アクセスが自動的にセットアップされます。
 - 使用可能なデータベースをネットワークで探索し、いずれかを選びます。プロファイルに定義されているデータベース用のクライアント・アクセスが自動的にセットアップされます。ホストまたは iSeries データベースを定義された DB2 Connect Enterprise Edition サーバーを介する場合を除き、DB2 Connect[™] Personal Edition は、ホストまたは iSeries[™] データベースを検索できません。
 - 必要な接続パラメーターを入力して、データベースへの接続を手動で構成します。
- カタログされたデータベースを除去したり、カタログされたデータベースのプロパティを変更します。
- クライアント用のデータベースおよび構成情報を含むクライアント・プロファイルをエクスポートおよびインポートします。
- システムで識別されたローカルまたはリモート・データベースへの接続をテストします。
- リストでユーティリティまたはバインド・ファイルを選択して、アプリケーションをデータベースにバインドします。
- CLI/ODBC データ・ソースを追加、変更、除去してから、CLI/ODBC 構成設定値を構成します。
- システム上のクライアント構成パラメーターを調整します。パラメーターの選択時には、パラメーターは論理的にグループ分けされ、提案される設定がインターフェースに表示されます。
- データベース・サーバー・パスワードを更新します。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』
- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect のバインディング・データベース・ユーティリティ』
- 53 ページの『CA を使用した、ホストまたは iSeries データベース・サーバーへの接続の構成』

DB2 Application Development Client を使用したアプリケーションの開発

DB2 Application Development Client は、データベース・アプリケーション開発者の要件を満たすよう設計されたツールの集まりです。これには、文字ベース、マルチメディア、またはオブジェクト指向のアプリケーションを作成するためのライブラリー、ヘッダー・ファイル、文書化された API、およびサンプル・プログラムが含まれます。

プラットフォーム固有の DB2 Application Development Client は、各サーバーの CD-ROM に収録されています。さらに、開発者エディションのパッケージには、サポートされている複数のオペレーティング・システム用の Application Development Client が含まれています。たとえば、パーソナル開発者エディションのパッケージには、Windows、および Linux 用のアプリケーション開発 CD-ROM が含まれています。さらに、Universal Developer's Edition のパッケージには、サポートされるすべてのオペレーティング・システム用のアプリケーション開発 CD-ROM が含まれています。

これらのアプリケーションは、DB2 クライアントを介してすべてのサーバーにアクセスすることができ、また DB2 Connect 製品 (または DB2 Enterprise Server Edition に付属している DB2 Connect 機能) を使用すれば、DB2 UDB for iSeries、DB2 for OS/390 and z/OS、および DB2 for VSE & VM データベース・サーバーにアクセスすることもできます。

DB2 Application Development Client では、次のようなインターフェースを使用するアプリケーションを開発することができます。

- 組み込み SQL
- コール・レベル・インターフェース (CLI) 開発環境 (Microsoft の ODBC と互換性があります)
- Java データベース・コネクティビティー (JDBC)
- Java Embedded SQL (SQLj)
- 管理機能を使用して DB2 データベースを管理する、DB2 アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)

関連概念:

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『DB2 Developer's Edition 製品』

関連資料:

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Application Development Client』

DB2 Connect Personal Edition のインストールと構成に必要な標準ステップ

DB2 Connect[®] のセットアップは、複数のステップから成るプロセスです。以下のトピックでは、DB2 Connect[™] Personal Edition をインストールおよび構成するのに必要な通常のステップについて述べています。

1. DB2 Connect をネットワーク内でどのように活用したいかを決定します。
2. ハードウェア前提条件とソフトウェア前提条件を、ワークステーションでもホスト・データベース・サーバーでも満たしていることを確認します。
3. ホストまたは iSeries[™] データベース・サーバーが、DB2 Connect サーバーからの接続を受け入れられるように構成されていることを確認します。
4. DB2 Connect のソフトウェアをインストールします。現在のワークステーションを使用して、ホストおよび iSeries の接続を構成および検査します。
5. インストールが完了したら、DB2 Connect とホストまたは iSeries データベース・システムとの間の接続を確立します。

DB2 Connect は、すべての TCP/IP 接続とほとんどの SNA 接続を検出して、構成することができます。構成アシスタントを使えば、ホスト・データベースを検索できます。

注: 今後のリリースの DB2 Connect では SNA はサポートされない可能性があるため、TCP/IP に切り替えるべきかどうかを検討する必要があります。

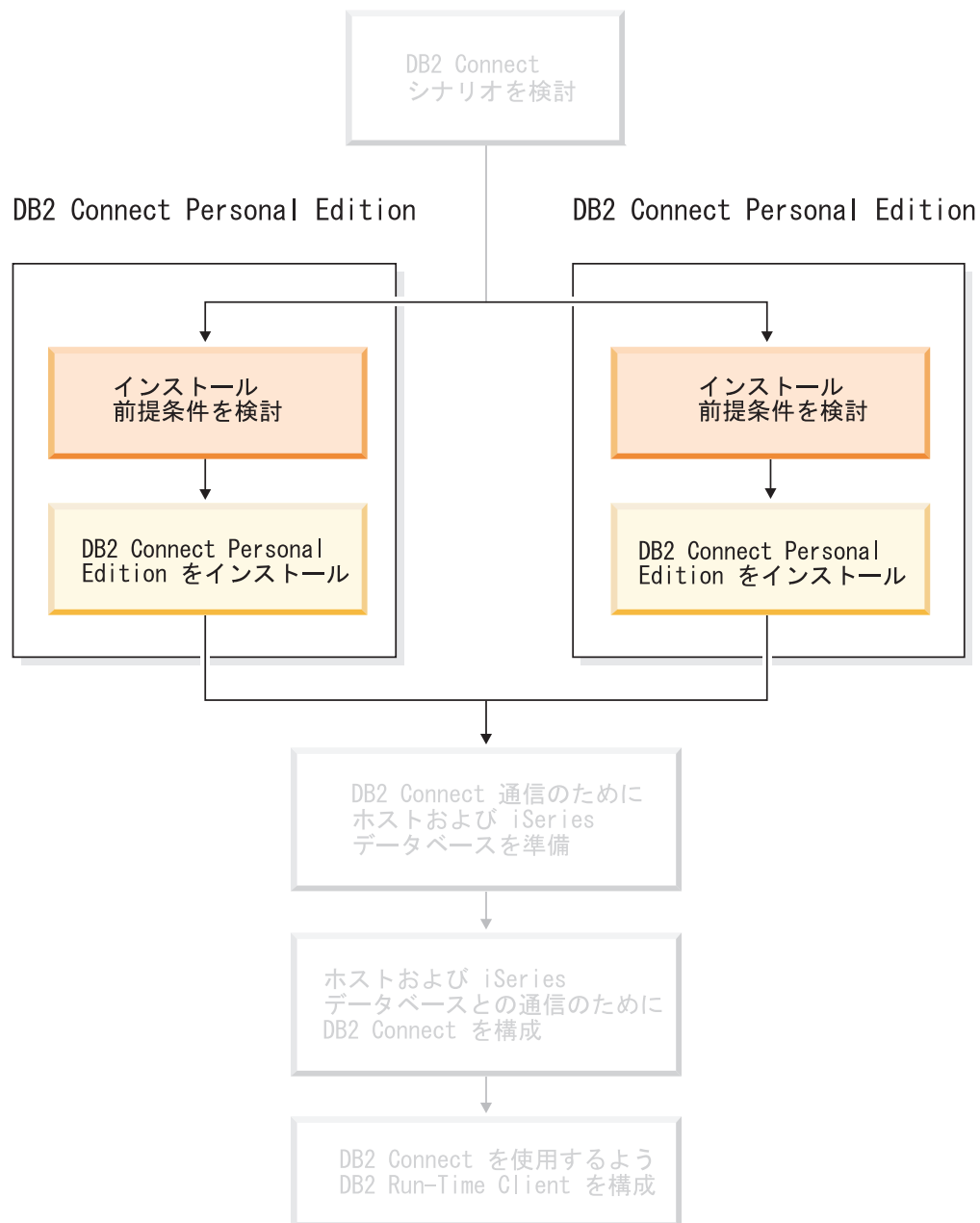
SNA の場合、構成に関するかなりの知識を必要とし、構成プロセスそのものがエラーを生じやすいことは明らかです。TCP/IP のほうが、簡単に構成することができ、保守コストも低く、しかもパフォーマンスに優れています。

6. DB2 Connect に付属しているプログラムおよびユーティリティを、ホストまたは iSeries データベースへバインドします。
7. ホストまたは iSeries 接続をテストします。
8. これで、DB2 Connect とすべてのアプリケーションを使用する準備が整いました。アプリケーション開発に使用するワークステーションには、DB2 Application Development Client をインストールする必要があります。
9. このワークステーションを使用して DB2 for OS/390[®] and z/OS[™]、または DB2 Universal Database[™] for UNIX[®]、Windows[®] サーバーを管理したい場合、DB2 Administration Client をインストールしてください。

関連タスク:

- 「DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」の『DB2 Connect のバインディング・データベース・ユーティリティ』
- 53 ページの『CA を使用した、ホストまたは iSeries データベース・サーバーへの接続の構成』

第 2 部 計画およびインストール



第 2 章 DB2 Connect PE のインストール (Windows)

インストール要件

DB2 Connect Personal Edition のインストール要件 (Windows)

DB2 Connect Personal Edition をインストールするには、以下のオペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の要件を満たす必要があります。

オペレーティング・システムの要件

以下のいずれかです。

- Windows ME
- Service Pack 6a 以降を装備した Windows NT バージョン 4
- Windows 2000
- Windows XP (32 ビットおよび 64 ビット)
- Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット)

ソフトウェア要件

- MDAC 2.7 が必要です。DB2 セットアップ・ウィザードは、MDAC 2.7 がまだインストールされていない場合はインストールします。
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャやユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成および実行したりするには、適切な SDK が必要です。インストールされる一部のコンポーネントで SDK が必要になる場合で、その SDK がまだインストールされていない場合、DB2 セットアップ・ウィザードまたは応答ファイルを使用して製品をインストールすると、SDK がインストールされます。DB2 Run-Time Client では、SDK はインストールされません。SDK 要件は、以下のとおりです。
 - Windows 32 ビット: SDK 1.3.1 または SDK 1.4.1 Service Release 1
 - Windows 64 ビット: SDK 1.4.1 Service Release 1

最新の SDK 情報は、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

通信要件

- APPC、TCP/IP、および MPTN (TCP/IP を介する APPC) を使用することができます。
- SNA (APPC) 接続には、次に示す通信用ソフトウェア製品のいずれかが必要です。
 - Windows ME
 - IBM パーソナル・コミュニケーションズ バージョン 5.7 以降
 - Windows NT の場合
 - IBM Communications Server バージョン 6.1.1 以降。
 - IBM パーソナル・コミュニケーションズ バージョン 5.7 以降

- Windows 2000 の場合
 - IBM Communications Server バージョン 6.1.1 以降。
 - IBM パーソナル・コミュニケーションズ バージョン 5.7 以降
- Windows XP の場合
 - IBM パーソナル・コミュニケーションズ バージョン 5.7 以降
- Microsoft SNA Server バージョン 3 (Service Pack 3 適用) 以降

注:

1. 今後のリリースの DB2 Connect では SNA はサポートされない可能性があるため、TCP/IP に切り替えるべきかどうかを検討する必要があります。SNA の場合、構成に関するかなりの知識を必要とし、構成プロセスそのものがエラーを生じやすいことは明らかです。TCP/IP のほうが、簡単に構成することができ、保守コストも低く、しかもパフォーマンスに優れています。
2. SNA は、Windows XP (64 ビット) および Windows Server 2003 (64 ビット) ではサポートされません。

関連タスク:

- 26 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストール (Linux)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的なサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になります。

必須のソフトウェア、通信製品、およびドキュメンテーションのために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 UDB は 256 MB 以上の RAM を必要とします。GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。

- システム上で実行される他のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要です。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって変化します。
- メモリー要件は、データベース・アクティビティの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数によって変化します。
- Linux では、最低でも RAM の 2 倍の SWAP スペースが推奨されています (要求されているわけではありません)。

ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)

Windows 2000 または Windows Server 2003 で Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用する予定の場合、ディレクトリー・スキーマを拡張して、DB2 オブジェクト・クラスおよび属性定義を組み込まなければなりません。この作業は、DB2 製品をインストールする前に行う必要があります。

前提条件:

Windows ユーザー・アカウントは、スキーマ管理権限をもっていなければなりません。

手順:

ディレクトリー・スキーマを拡張するには、以下の手順に従います。

1. ドメイン・コントローラーとしてログオンします。
2. スキーマ管理権限で、インストール CD から **db2schex.exe** プログラムを実行します。このプログラムは、以下のようにスキーマ管理権限を使用して、ログオフおよび再度ログオンをすることなく実行できます。

```
runas /user:MyDomain\Administrator x:%db2%\Windows\utilities\db2schex.exe
```

ここで、x: は CD-ROM の文字です。

db2schex.exe が完了したら、DB2 製品のインストールに進むことができます。

関連資料:

- 「*DB2 Universal Database* サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)』

DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)

Windows NT、Windows 2000、Windows XP、または Windows Server 2003 にインストールする場合、次の DB2 サーバー・ユーザー・アカウントが必要です。

- インストール・ユーザー・アカウント

- 1 つ以上のセットアップ・ユーザー・アカウント
 - DB2 Administration Server (DAS) ユーザー・アカウント
 - DB2 インスタンス・ユーザー・アカウント

インストール・ユーザー・アカウントは、DB2 セットアップ・ウィザードの実行前に定義する必要があります。セットアップ・ユーザー・アカウントは、インストールの前に定義することもできますし、DB2 セットアップ・プログラムで作成することも可能です。

ユーザー・アカウント名はすべて、システムの命名規則と DB2 の命名規則に準拠していなければなりません。

DB2 拡張セキュリティー (Windows):

DB2 には、拡張された Windows セキュリティーが用意されるようになりました。ユーザー ID を使用して DB2 をインストールできますが、そのユーザー ID が DB2ADMNS および DB2USERS グループに属していない場合、そのユーザー ID では DB2 コマンドを実行できません。

DB2 インストーラーはこれら 2 つの新しいグループを作成します。新しい名前を使用するか、デフォルト名を受け入れることができます。

このセキュリティー機能を使用可能にするには、DB2 のインストール時に、DB2 のオブジェクトに関するオペレーティング・システムのセキュリティーを有効にするパネルで、オペレーティング・システムのセキュリティーを有効にするチェック・ボックスを選択している必要があります。「DB2 管理者グループ (DB2 Administrators Group)」フィールドと、「DB2 ユーザー・グループ (DB2 Users Group)」フィールドで、デフォルト値を受け入れます。デフォルトのグループ名は DB2ADMNS と DB2USERS です。既存のグループ名と競合する場合、グループ名を変更するようプロンプトが出されます。必要であれば、独自の値を指定できます。

DB2 サーバー・ユーザー・アカウント:

インストール・ユーザー・アカウント

インストールを実行するには、ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントが必要です。このユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシン上で、管理者 グループに属していなければなりません。

ドメイン・アカウントの場合、DB2 サーバーのユーザー ID を検査するために、インストール・ユーザー ID は、アカウントを作成する予定のドメイン上で、ドメイン管理者グループに属していなければなりません。

さらに、組み込みローカル・システム・アカウントを使用して、DB2 UDB Enterprise Server Edition 以外のすべての製品でインストールを実行することも可能です。

DB2 Administration Server (DAS) ユーザー・アカウント

DB2 Administration Server (DAS) には、ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントが必要です。

応答ファイルのインストールを実行している場合、応答ファイルにローカル・システム・アカウントを指定することもできます。詳細は、`db2\windows\samples` ディレクトリーのサンプル応答ファイルを参照してください。

DB2 Administration Server (DAS) は、GUI ツールをサポートし、ローカルおよびリモート DB2 サーバーでの管理タスクを支援するために使用される、特別な DB2 管理サービスです。DAS には、DAS サービスの開始時に DAS サービスでコンピューターにログオンするのに使用される、割り当てられたユーザー・アカウントがあります。

DB2 をインストールする前に DAS ユーザー・アカウントを作成するか、DB2 セットアップ・ウィザードで作成することができます。DB2 セットアップ・ウィザードで新しいドメイン・ユーザー・アカウントを作成する場合、インストールを実行するのに使用するユーザー・アカウントには、ドメイン・ユーザー・アカウントを作成するための権限が必要です。このユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシン上で、管理者グループに属していなければなりません。このアカウントには、次のユーザー権限が付与されます。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- プログラムのデバッグ
- トークン・オブジェクトの作成
- メモリー内へのページのロック
- サービスとしてログオン
- クォータの増加
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

「メモリー内へのページのロック」権限は、AWE (Advanced Windowing Extensions) のサポートが必要です。「プログラムのデバッグ」権限は、DB2 グループ検索でアクセス・トークンを使用すると明示的に指定される場合にのみ必要です。

ユーザー・アカウントがインストール・プログラムで作成される場合、そのユーザー・アカウントにはこれらの権限が付与され、ユーザー・アカウントがすでに存在する場合にも、そのアカウントにこれらの権限が付与されます。インストールによって権限が付与される場合、その一部は、権限を付与されたアカウントで最初にログオンする場合か、リポート時にのみ有効になります。

DAS ユーザーは、必要な場合に他のインスタンスを開始したり停止したりできるように、それぞれの環境内の各 DB2 システムに対して SYSADM 権限を持つことをお勧めします。デフォルトでは、管理者グループの一部であるユーザーはすべて、SYSADM 権限を持っています。

DB2 インスタンス・ユーザー・アカウント

DB2 インスタンス用に、ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントが必要です。各 DB2 インスタンスには、インスタンスの作成時に 1 人のユーザーが割り当てられます。DB2 は、インスタンスの開始時に、このユーザー名でログオンします。

さらに、組み込みローカル・システム・アカウントを使用して、DB2 UDB Enterprise Server Edition 以外のすべての製品でインストールを実行することも可能です。

DB2 をインストールする前に DB2 インスタンス・ユーザー・アカウントを作成するか、DB2 セットアップ・ウィザードで作成することができます。DB2 セットアップ・ウィザードで新しいドメイン・ユーザー・アカウントを作成する場合、インストールを実行するのに使用するユーザー・アカウントには、ドメイン・ユーザー・アカウントを作成するための権限が必要です。このユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシン上で、管理者 グループに属していなければなりません。このアカウントには、次のユーザー権限が付与されます。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- プログラムのデバッグ
- トークン・オブジェクトの作成
- クォータの増加
- メモリー内へのページのロック
- サービスとしてログオン
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

「メモリー内へのページのロック」権限は、AWE (Advanced Windowing Extensions) のサポートが必要です。「プログラムのデバッグ」権限は、DB2 グループ検索でアクセス・トークンを使用すると明示的に指定される場合にのみ必要です。

ユーザー・アカウントがインストール・プログラムで作成される場合、そのユーザー・アカウントにはこれらの権限が付与され、ユーザー・アカウントがすでに存在する場合にも、そのアカウントにこれらの権限が付与されます。インストールによって権限が付与される場合、その一部は、権限を付与されたアカウントで最初にログオンする場合か、リブート時にのみ有効になります。

Windows 2000 での DB2 のインストール時のディレクトリー選択

DB2 は、すべてのユーザーが書き込みアクセス権限を持つディレクトリーにインストールする必要があります。DB2 が、一部のユーザー (たとえば、管理者) だけが書き込みアクセス権限を持つディレクトリーにインストールされる場合、一般ユーザーは、DB2 コマンド行プロセッサを使用しようとすると、エラー SQL1035N を受け取る場合があります。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ユーザー、ユーザー ID、およびグループの命名規則』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『単一パーティションのインストール (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『パーティション・インストール (Windows)』

DB2 Connect Personal Edition のインストール (Windows)

このタスクでは、DB2 Connect Personal Edition を Windows オペレーティング・システムへインストールする方法について説明します。

前提条件:

「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードを立ち上げる前に以下を行ってください。

- システムが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ハードウェア、分散、およびソフトウェアの要件。
 - ディスクおよびメモリー要件
- Windows 2000 または Windows Server 2003 をインストールしてから、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用する予定の場合、ディレクトリー・スキーマを拡張しなければなりません。
- インストールを実行するときは、管理者アカウントを使用することをお勧めします。その管理者アカウントの帰属先は、DB2 製品のインストール先の Windows コンピューターで、ローカル管理者グループに所属していなければならず、また以下のような拡張ユーザー権限をもっていなければなりません。
 - オペレーティング・システムの一部として機能
 - トークン・オブジェクトの作成
 - クォータの増加
 - プロセス・レベル・トークンの置き換え

この拡張ユーザー権限がなくてもインストールを実行することはできますが、セットアップ・プログラムでアカウントの妥当性検査ができない可能性があります。

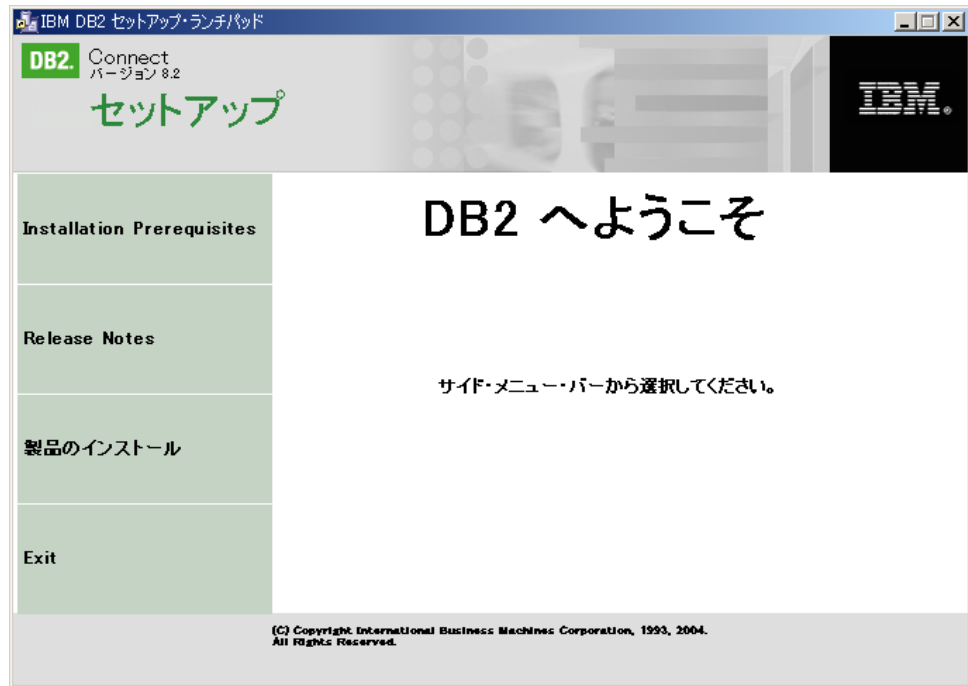
- 非管理者アカウントを使って DB2 Connect をインストールしたい場合は、『非管理者による DB2 Connect のインストール』を参照してください。

手順:

DB2 Connect Personal Edition をインストールするには、以下のタスクを実行します。

1. 管理者権限をもつユーザーとしてシステムにログオンします。
2. すべてのプログラムをシャットダウンし、インストール・プログラムが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. CD-ROM をドライブに挿入します。自動実行フィーチャーによって「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードが自動的に起動します。「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを別の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動開始しない場合、「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードを手動で起動することができます。

4. 「DB2 ランチパッド (DB2 Launchpad)」がオープンします。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。

5. インストールを開始したら、セットアップ・プログラムをプロンプトに従って作業を進めます。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、または F1 キーを押します。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、db2.log ファイルを参照してください。db2.log ファイルに、インストールおよびアンインストール作業で生じた一般情報とエラー・メッセージが保管されます。デフォルトでは db2.log ファイルは `x:\db2log` ディレクトリにあります。ただし `x:` は、オペレーティング・システムがインストールされているドライブです。

手動で「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」を起動するには、以下のタスクを実行します。

1. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」オプションを選択します。
2. 「開く」フィールドで、次のコマンドを入力します。

```
x:%setup /i language
```

ここで、

- `x:` は使用する CD-ROM ドライブを表します。
 - `language` は言語に関するテリトリリー・コードを表します (たとえば、英語では EN になります)。
3. 「OK」をクリックします。

DB2 製品がローカル・コンピューターまたはネットワークの他のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにする場合、DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が収められています。

関連概念:

- 23 ページの『非管理者による DB2 Connect (Windows) のインストール』
- 11 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストールと構成に必要な標準ステップ』
- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 17 ページの『ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)』
- 90 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

関連資料:

- 15 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストール要件 (Windows)』
- 「コマンド・リファレンス」の『setup - Install DB2 コマンド』

非管理者による DB2 Connect (Windows) のインストール

非管理者のインストールは Windows® NT、Windows 2000 Professional および Windows XP でのみ可能ですが、ログオンするアカウントは、ゲスト・グループより大きい権限を持つグループに属していなければなりません。Windows 2000 および Windows XP では、パワー・ユーザー・グループに属していなければなりません。Windows NT® では、最低でもユーザー・グループに属している必要があります。

レジストリーで表示される DB2® Connect の情報の一部は、レジストリーの HKEY_CURRENT_USER フォルダに入力しなければなりません。DB2 Connect™ の非管理者のインストールのレジストリーの下には、HKEY_LOCAL_MACHINE フォルダに多くの項目が保管されますが、HKEY_CURRENT_USER で環境設定を変更しなければなりません。

非管理者のインストールの場合には、システム・ショートカットはユーザー・ショートカットに変更されなければなりません。さらに、DB2 Connect 製品をインストールするにはサービスが必要ですが、管理権限がなければこれを作成することができません。したがって、非管理者のインストールの際には、サービスがプロセスとして自動的に実行されます。

以下は、管理者と非管理者の両方のインストールが存在する環境で発生する可能性のあるインストール状態を示しています。

- 非管理者が DB2 Connect をインストールした後で、管理者がその同じマシンに DB2 Connect をインストールしようとする場合。管理者は、同製品はすでにインストール済みであるというメッセージを受け取ります。管理者は、その状況に対処するための製品のアンインストールと再インストールの権限をもっています。

複数の製品が Windows プラットフォーム上に共存することはできません。レジストリーは 1 つしか存在せず、しかも DB2 を複数回インストールすることはできないからです。

- 非管理者が DB2 Connect をインストールした後で、別の非管理者が同じマシンに DB2 Connect をインストールしようとする場合。このシナリオでは、インストールをしようとしても失敗し、ユーザーが製品をインストールするには管理者でなければならないという旨のエラー・メッセージが戻されます。
- 管理者が DB2 Connect をインストールした後で、非管理者が同じマシンに DB2 Connect をインストールしようとする場合。このシナリオでは、インストールをしようとしても失敗し、ユーザーが製品をインストールするには管理者でなければならないという旨のエラー・メッセージが戻されます。管理者はアンインストールまたは再インストールする権限を常にもっています。

関連タスク:

- 21 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストール (Windows)』
- 「*DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール*」の『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Windows)』

第 3 章 DB2 Connect PE のインストール (Linux)

インストール要件

DB2 Connect Personal Edition のインストール要件 (Linux)

DB2 Connect Personal Edition をインストールするには、以下のオペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の要件を満たす必要があります。

ハードウェア要件

以下のプロセッサのいずれかでなければなりません。

- x86 互換のもの (たとえば、Intel、AMD、または Cyrix)。
- 64 ビット・バージョンの Linux 用の Intel Itanium プロセッサ (IA64)。

配布要件

サポートされる配布およびカーネル・レベルの最新情報は、<http://www.ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

ソフトウェア要件

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャやユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成および実行したりするには、適切な SDK が必要です。インストールされる一部のコンポーネントで SDK が必要になる場合で、その SDK がまだインストールされていない場合、DB2 セットアップ・ウィザードまたは応答ファイルを使用して製品をインストールすると、SDK がインストールされます。DB2 Run-Time Client では、SDK はインストールされません。SDK 要件は、以下のとおりです。

- Linux 32 ビット: SDK 1.3.1 または SDK 1.4.1 Service Release 1
- Linux Red Hat EL 3 32 ビット: SDK 1.4.1 Service Release 2
- Linux IPF 64 ビット: SDK 1.3.1
- LinuxAMD 64 ビット: SDK 1.3.1

最新の SDK 情報は、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

オンライン・ヘルプを表示するには、ブラウザが必要です。

通信要件

TCP/IP 接続のために追加のソフトウェアは必要ありません。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 26 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストール (Linux)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的なサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になります。

必須のソフトウェア、通信製品、およびドキュメンテーションのために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 UDB は 256 MB 以上の RAM を必要とします。GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。
- システム上で実行される他のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要です。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さによって変化します。
- メモリー要件は、データベース・アクティビティの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数によって変化します。
- Linux では、SWAP スペースが最低でも RAM の 2 倍の容量になるようにしてください。

DB2 Connect Personal Edition のインストール (Linux)

DB2 Connect Personal Edition を Linux にインストールするには、「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードを使用することをお勧めします。「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードは、すべての DB2 製品のインストールと構成タスクの自動化のための Java ベースのインストール・ツールです。このウィザードを使用したくない場合は、db2_install コマンドを使えば DB2 製品を手動でインストールできます。

前提条件:

インストールを開始する前に以下を行ってください。

- システムが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ハードウェア、分散、およびソフトウェアの要件。
 - ディスクおよびメモリー要件
- インストールを実行するには root 権限が必要です。
- ご使用のシステムに DB2 製品の CD-ROM をマウントしなければなりません。DB2 インストール CD のマウントの項を参照してください。

手順:

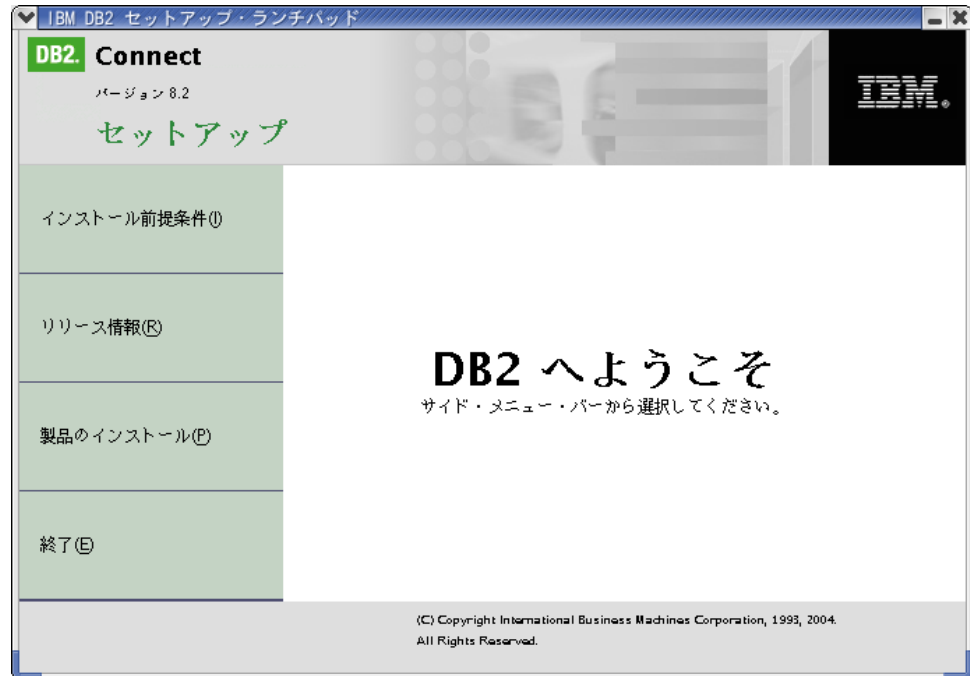
DB2 Connect Personal Edition を Linux にインストールするには、以下のタスクを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
2. 次のコマンドを入力することによって、CD-ROM がマウントされているディレクトリに移動します。

```
cd /mnt/cdrom
```

ただし、`/mnt/cdrom` は CD-ROM のマウント・ポイントを表します。

3. **`./db2setup`** コマンドを入力して「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードを開始します。グラフィカル・インストーラーを立ち上げるには、X Window が稼働していなければなりません。しばらくして IBM DB2 セットアップ・ランチパッドがオープンします。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。

インストールを開始したら、「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードのパネルを順にたどりながら各種の選択を行います。「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードでは、インストール操作のヘルプを利用できます。インストール操作のヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、または F1 キーを押します。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了 (Finish)」をクリックしてはじめて DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストールが完了すると DB2 Connect Personal Edition は、/opt/IBM/db2/V8.1 にインストールされています。

DB2 製品がローカル・コンピューターまたはネットワークの他のコンピューター上の DB2 資料にアクセスできるようにする場合、DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。DB2 インフォメーション・センターには、DB2 Universal Database および DB2 関連製品の資料が収められています。

関連概念:

- 11 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストールと構成に必要な標準ステップ』
- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』

- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 25 ページの『DB2 Connect Personal Edition のインストール要件 (Linux)』
- 「リリース情報」の『アジア言語フォントの使用の可能性 (Linux)』

第 3 部 インストール後の作業

第 4 章 ユーザー ID の追加

DB2ADMNS および DB2USERS ユーザー・グループへのユーザー ID の追加

DB2 のインストールが正常に完了したら、ユーザーを DB2ADMNS または DB2USERS グループに追加して、それらのユーザーが DB2 にアクセスできるようにする必要があります。DB2 インストーラーは 2 つの新しいグループを作成します。新しい名前を使用するか、デフォルト名を受け入れることができます。デフォルトのグループ名は DB2ADMNS と DB2USERS です。

前提条件:

- DB2 のインストールが完了している必要があります。
- DB2 のインストール時に、DB2 のオブジェクトに関するオペレーティング・システムのセキュリティーを有効にするパネルで、オペレーティング・システムのセキュリティーを有効にするチェック・ボックスを選択している必要があります。

手順:

ユーザーを適切なグループに追加するには、以下の手順に従います。

1. 「ユーザーおよびパスワード管理 (Users and Passwords Manager)」ツールを起動します。
2. 追加するユーザー名をリストから選択します。
3. 「プロパティ (Properties)」をクリックします。「プロパティ (Properties)」ウィンドウで、「グループ・メンバーシップ (Group Membership)」タブをクリックします。
4. 「その他 (Other)」ラジオ・ボタンを選択します。
5. ドロップダウン・リストから適切なグループを選択します。

インストール時に新しいセキュリティー機能を有効にしない設定を選択した場合でも、インストール後に **db2secv82.exe** コマンドを実行することによって有効にすることができます。

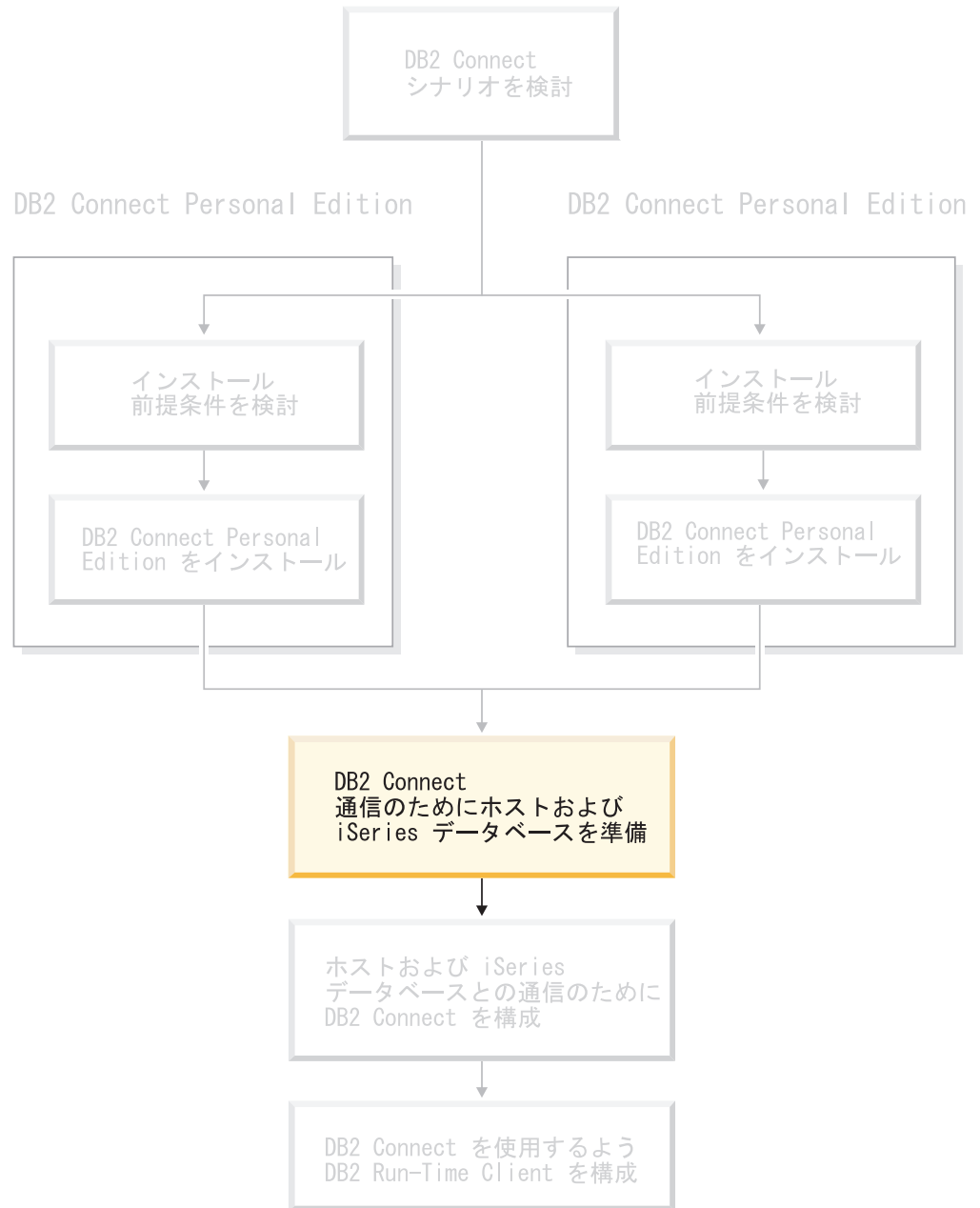
db2secv82.exe コマンドを使用してこのセキュリティー機能を有効にした後、この設定を元に戻すには以下の 2 つの方法があります。

1. システムに変更を加えないうちに、db2secv82.exe コマンドをすぐに再実行します。システムに何かの変更を加えた場合は、2 番目の方法を使用してください。
2. Everyone グループを DB2ADMNS および DB2USERS グループに追加します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2secv82 - Set permissions for DB2 objects コマンド』

第 4 部 DB2 Connect 通信のためのホストおよび iSeries データベースの準備



このセクションでは、DB2 Connect からの接続を受け入れるようにホストおよび iSeries データベース・サーバーを構成する場合に必要なステップについて説明します。これらのステップは、必要なシステム特権と特殊な専門的知識を持つ、ネットワークまたはシステム管理者、あるいは DB2 管理者などのユーザーが実行する必要があります。

ホストおよび iSeries データベース・サーバーの構成については、以下の資料を参照してください。

- 「*DB2 for OS/390 and z/OS インストール・ガイド*」には、DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 に関する最も包括的かつ最新の情報が記載されています。
- 「*Distributed Relational Database Cross Platform Connectivity and Applications*」には、役立つ構成後の情報が載せられています。
- 「AS/400 分散データベース プログラミング V4」

このセクションで使用するサンプル値は、本書の他の部分で使用する値と一致しています。以下の部分で提供される指示を実行する際、ホスト名、ポート番号、ネットワーク名、論理装置 (LU) 名、およびモード名などのエレメントは、自分で指定する値に置き換える必要があります。

第 5 章 DB2 Connect 通信のための DB2 for OS/390 and z/OS データベースの準備

DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の準備

VTAM 管理者およびホスト・システム管理者は、VTAM と OS/390 または z/OS を構成し、DB2 Connect ワークステーションからのインバウンド接続要求を受け取るように DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 を準備する必要があります。

このトピックは以下について述べています。

- DB2 Connect と DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 との間の TCP/IP (伝送制御プロトコル/インターネット・プロトコル) ネットワーク接続を確立するための指示。
- DB2 Connect SNA 接続で使用する DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 ホストに必要な VTAM 定義の例。これらを、現行の定義と比較してください。
- DB2 ホストの構成ステップ。これらのステップの詳細の多くは、DB2 UDB for OS/390 バージョン 6.1 が紹介されたときに変更されています。これらのステップは、TCP/IP を介して DB2 Universal Database for z/OS および OS/390 に接続するユーザーに適用されます。しかし、SNA ユーザーに適用されるステップもあります。TCP/IP に適用されるステップを使用することをお勧めします。

DB2 for OS/390 がマルチサイト更新トランザクション (2 フェーズ・コミット) に参与する予定の場合は、『マルチサイト更新の使用可能化』の項を参照してください。

手順:

DB2 Connect からの接続要求を受け入れるように DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 を準備するには、以下のようにプロトコルを構成する必要があります。

- DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成
- DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の構成
- VTAM の構成

関連タスク:

- 38 ページの『DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成』
- 41 ページの『DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の構成』
- 42 ページの『VTAM の構成』
- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『コントロール・センターを使ったマルチサイト更新の使用可能化』

DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成

このトピックでは、DB2 Connect ワークステーションとバージョン 6.1 以降の DB2 UDB for OS/390 との間の TCP/IP 通信を構成する方法について説明します。この説明では、以下を前提としています。

- TCP/IP によって単一のホスト・データベースに接続している。それぞれの場合に
必要なポート番号 とサービス番号 が異なっても、複数のホスト接続を全く
同じ方法で処理します。
- ターゲット・データベースが DB2 UDB for OS/390 バージョン 6.1 以降にあ
る。
- 必要なすべての前提条件ソフトウェアがインストールされている。
- 必要なだけの DB2 クライアントがセットアップされている。

TCP/IP をサポートする場合の OS/390 前提条件:

OS/390 V2R3+ は、TCP/IP サポートに必要な最低限のオペレーティング・システ
ム・レベルです。お勧めのオペレーティング・システムは OS/390 V2R5+ で、こ
のレベルであれば最高のパフォーマンスを得られます。どのバージョンの z/OS も
TCP/IP をサポートします。

以下の DB2 for OS/390 の通知用の APAR は、TCP/IP for OS/390 を筆頭として各
種の OS/390 コンポーネントごとにインストールする PTF に関する情報に応じて定
期的に更新されます。DB2 for OS/390 で TCP/IP 接続を使用する場合、以下の
DB2 for OS/390 APAR 情報に記述されている PTF および APAR 修正を再検討し
適用することは大変重要です。

- II11164
- II11263
- II10962

情報の収集:

TCP/IP 接続によって DB2 Connect を使用できるようになるには、その前にホス
ト・データベース・サーバーと DB2 Connect サーバーの両方についての情報を収集
する必要があります。TCP/IP によって接続しているそれぞれのホスト・サーバー
については、以下の情報が必要です。

- DB2 Connect ワークステーションでの TCP/IP services ファイルおよび hosts フ
ァイルの位置

UNIX の場合

/etc/

Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003 の場合

通常は、`%SystemRoot%\system32\drivers\etc\`。 `%SystemRoot%` は、
Windows インストール・パス・ディレクトリーを示します。

Windows 98 および Windows ME の場合

通常、`x:\windows\`。ここで、`x:` は Windows のインストール・パス・デ
ィレクトリーを表しています。

ドメイン・ネーム・サーバー にホスト情報を追加して、複数のシステムでこのファイルを保持しないようにすることができます。

- ターゲット DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 ホストでの等価ファイルの位置。
- DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 に対して定義される TCP/IP ポート番号。

注: 関連するサービス名 情報は、DB2 Connect ワークステーションと DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 との間で交換されません。
ポート番号 446 は、DB2 Connect ワークステーションからの通信でのデフォルトとして登録されています。

- ホストおよび DB2 Connect ワークステーションの両方に使用できる TCP/IP アドレスおよびホスト名。
- DB2 for OS/390 データベース・サーバーのロケーション名。
- ホストまたは iSeries サーバーでデータベースに対して CONNECT 要求を出すときに使用されるユーザー ID およびパスワード。

この情報を入手するためのヘルプは、ローカル・ネットワーク管理者および DB2 for OS/390 and z/OS 管理者にお問い合わせください。表 1 の例にあるワークシートの 1 つのコピーを使用して、DB2 Connect とホスト・データベース・サーバーの間にそれぞれの TCP/IP 接続を計画します。

表 1. DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 への TCP/IP 接続を計画するワークシートの例

参照番号	説明	サンプル値	使用値
ユーザー情報			
TCP-1	ユーザー名	A.D.B.User	
TCP-2	連絡先	(123)-456-7890	
TCP-5	ユーザー ID	ADBUSER	
TCP-6	データベース・タイプ	db2390	
TCP-7	接続タイプ (TCPIP でなければならない)	TCPIP	TCPIP
ホストでのネットワーク・エレメント			
TCP-8	ホスト名	MVSHOST	
TCP-9	ホスト IP アドレス	9.21.152.100	
TCP-10	サービス名	db2inst1c	
TCP-11	ポート番号	446	446
TCP-12	ロケーション名	NEW_YORK3	
TCP-13	ユーザー ID		
TCP-14	パスワード		
DB2 Connect ワークステーションでのネットワーク・エレメント			
TCP-18	ホスト名	mcook02	
TCP-19	IP アドレス	9.21.27.179	
TCP-20	サービス名	db2inst1c	
TCP-21	ポート番号	446	446
(DB2 Connect ワークステーションでの) DB2 ディレクトリー項目			
TCP-30	ノード名	MVSIPNOD	
TCP-31	データベース名	nyc3	

表 1. DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 への TCP/IP 接続を計画するワークシートの例 (続き)

参照番号	説明	サンプル値	使用値
TCP-32	データベース別名	mvsipdb1	
TCP-33	DCS データベース名	nyc3	

注:

- ホストの IP アドレス **TCP-9** を獲得するには、ホストで以下のように入力します。
TSO NETSTAT HOME
- ポート番号 **TCP-11** を獲得するには、DB2 マスター・アドレス・スペースまたはシステム・ログで DSNL004I を検索します。

TCP/IP 接続の構成:

このセクションで説明されているステップを行って、構成を完了し接続を確立します。

ワークシートの完成:

以下のように、それぞれの TCP/IP ホストごとに、ワークシートの例のコピーを完成します。

- DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 ホスト (項目 8 および 9) のホスト名および IP アドレスに使用される値を入力する。
- DB2 Connect ワークステーション (項目 18 および 19) のホスト名および IP アドレス に使用される値を入力する。
- 接続 (項目 10 と 11、または 20 と 21) に使用するポート番号またはサービス名を決定する。
- 接続先の DB2 for OS/390 and z/OS データベース・サーバーのロケーション名。
- ホスト・データベースに接続するときにユーザー ID およびパスワードに使用される値を決定する。

DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 ホストの更新:

zSeries サーバーで以下を行います。

- ホスト・アドレスまたはホスト名を調べる。
- ポート番号またはサービス名を調べる。
- 必要なら、正しいポート番号とサービス名を使って services ファイルを更新する。
- 必要なら、DB2 Connect ワークステーションのホスト名と IP アドレスを使って、hosts ファイル (または DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 システムが使用するドメイン・ネーム・サーバー) を更新する。
- 接続をテストする前に、新しい定義がアクティブであることを確認する。必要に応じて、ホスト・ネットワーク管理者に相談するか、またはコントロール・スタッフを変更してください。
- 有効なユーザー ID、パスワード、および LOCATION NAME を持つ DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 管理者を調べる。

7. そのオプションがホスト・システム上で TCP/IP によってサポートされている場合、正しいポート番号を使って DB2 Connect サーバーを PING する。たとえば、次のようにします。

```
ping remote_host_name -p port_number
```

関連タスク:

- 42 ページの『VTAM の構成』

DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の構成

DB2 Connect を使用するには、その前に DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 管理者が DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 を構成し、DB2 Connect ワークステーションからの接続を許可する必要があります。この項では、DB2 Connect クライアントが DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 に接続できるようにするために必要な最小 更新を示します。さらに詳細な例に関しては、「*DB2 for OS/390 and z/OS Installation Guide*」を参照してください。

推奨される APAR:

DB2 for OS/390 and z/OS バージョン 7: APAR PQ50016 および PQ50017 のフィックスを適用してください。

SYSIBM.LUNAMES の更新:

この項には、DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 用にこれらのテーブルを更新するコマンドの例が示されています。DB2 管理者と協力して、ご使用の DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 システムに必要な更新を判別します。DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 コミュニケーション・データベース・テーブルの詳細については、「*DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 SQL リファレンス*」を参照してください。

着信 DB2 Connect LU からデータベース接続要求を受け入れられるようにするには、空白行を挿入するだけです。次のような SQL を使用します。

```
INSERT INTO SYSIBM.LUNAMES (LUNAME) VALUES ('      ')
```

その代わりに、LU 名によってアクセスを制限したい場合、以下のような SQL コマンドを使ってこのテーブルを更新することができます。

```
INSERT INTO SYSIBM.LUNAMES (LUNAME,  
                             SECURITY_OUT,  
                             ENCRYPTPSWDS,  
                             USERNAMES)  
VALUES('NYX1GW01','P','N','O');
```

結果は次のとおりです。

表 2. テーブルに加えた更新による結果セット

列	例	注釈
=====	=====	=====
LUNAME	NYX1GW01	DB2 Connect LU の名前
SECURITY_OUT	P	

表 2. テーブルに加えた更新による結果セット (続き)

列	例	注釈
ENCRYPTPSWDS	N	
USERNAMES	0	

関連タスク:

- 38 ページの『DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成』

VTAM の構成

VTAM を構成するため、VTAM 管理者はシステムで使用する名前とオプションを判別する必要があります。DB2 Connect ワークステーションをホストへ接続できるようにするには、以下の定義を提供する必要があります。

- DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 用の VTAM APPL 定義。DB2 サブシステムの APPL 名、つまり LU 名は、これらの例では NYM2DB2 です。
- DB2 Connect 用の VTAM PU および LU 定義。DB2 Connect ワークステーションの PU および LU 定義は、これらの例ではそれぞれ NYX1 および NYX1GW01 です。
- DB2 の VTAM ログ・モード定義。接続に使用されるログ・モード項目はこれらの例では IBMRDB です。

VTAM サンプル定義を、以下のセクションで説明します。

ネットワーク・エレメント名のサンプル (VTAM):

次の例では、ホスト・データベース・サーバーの構成に使用する VTAM 定義のサンプルを示します。


```

DB2 Connect Server:
- Network ID           : SPIFNET
- Local Node Name     : NYX1      (PU name)
- Local Node ID       : 05D27509

- LU Name              : SPIFNET.NYX1GW01
                       (the same LU is used
                       for DB2 Connect,
                       for DB2 Universal Database,
                       and for the SPM)
- LU Alias             : NYX1GW01

HOST:
- Network ID           : SPIFNET
- Node Name            : NYX

- LU Name              : SPIFNET.NYM2DB2
- LU Alias             : NYM2DB2
- LAN Destination Address : 400009451902 (NCP TIC address)

MODE DEFINITION:
- Mode Name            : IBMRDB

DB2 for OS/390:
- Location              : NEW_YORK3

SECURITY:
- Security Type        : Program
- Authentication Type  : DCS

```

OS/390 用または z/OS 用 VTAM APPL 定義のサンプル:

次の例では、VTAM アプリケーション・メジャー・ノード定義のサンプルを示します。ほとんどの場合、異なる LU 名を持つそのような定義がすでに存在しています。そのような定義が存在しない場合、このアプリケーション・メジャー・ノードを定義し、定義された LU 名を使用するために DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 をカスタマイズする必要があります。この名前は、DB2 Connect に必要なパートナー LU 名です。

```

-----1-----2-----3-----4-----5-----6-----7--
DB2APPLS VBUILD TYPE=APPL

NYM2DB2  APPL  APPC=YES,                                X
           AUTH=(ACQ),                                  X
           AUTOSSES=1,                                   X
           DLOGMOD=IBMRDB,                               X
           DMINWNL=512,                                  X
           DMINWNR=512,                                  X
           DSESSLIM=2048,                                X
           EAS=6000,                                     X
           MODETAB=RDBMODES,                             X
           PARSESS=YES,                                  X
           PRTCT=SFLU,                                    X
           MODETAB=RDBMODES,                             X
           SECACPT=ALREADYV,                             X
           SRBEXIT=YES,                                  X
           VERIFY=NONE,                                  X
           VPACING=8

```

注: 16 列目から連結を始める必要があり、72 列目に連結マークが付けられます。

DB2 Connect 用の VTAM PU および LU 定義のサンプル:

セキュリティー・ポリシー上可能であれば、DYNPU と DYNLU を VTAM で使用できるようにして、VTAM を介した PU および LU アクセスを可能にしてください。詳細については、VTAM 管理者と連絡をとってください。

次の例では、VTAM 交換回線メジャー・ノード定義のサンプルを示します。以下の例を参考に、特定の LU または PU を使用可能にします。

DB2 Connect ワークステーション上ですでに SNA を使用している場合、PU 定義がすでに存在しています。しかし、独立型 LU 定義は存在していない可能性があります。DB2 Connect に必要な独立型 LU 定義には、LOCADDR=0 と指定する必要があります。

```
-----1-----2-----3-----4-----5-----6-----7--
          SWITCHED MAJOR NODE DEFINITION FOR PU NYX1 and
          INDEPENDENT LU NYX1GW01
LOC300   VBUILD TYPE=LOCAL
NYX1     ADDR=01, IDBLK=071, IDNUM=27509, ANS=CONT, DISCNT=NO,      X
          IRETRY=YES, ISTATUS=ACTIVE, MAXDATA=4302, MAXOUT=7,      X
          MAXPATH=1, PUTYPE=2, SECNET=NO, MODETAB=RDBMODES,      X
          SSCPFM=USSSCS, PACING=0, VPACING=2
NYX1GW01 LOCADDR=000, MODETAB=RDBMODES, DLOGMODE=IBMRDB
OTHERLU  LOCADDR=002
```

DB2 用の VTAM ログ・モード定義のサンプル:

次の例では、VTAM ログオン・モード・テーブル定義 IBMRDB および SNASVCMG のサンプルのリストが示されています。この例では 4K の *RUSIZE* が指定されていますが、ご使用の環境には適していない可能性があります。たとえば、イーサネットを使用している場合、最大フレーム・サイズは 1536 バイトになります。VTAM 管理者にこれらの値を検査してもらい、DB2 Connect に指定すべきモード・テーブル項目名と *RUSIZE* を教えてもらう必要があります。APPC を使用する際は、*SNASVCMG* ログオン・モードを定義する必要があります。

	1	2	3	4	5	6	7
RDBMODES MODTAB							
IBMRDB	MODEENT	LOGMODE=IBMRDB,	DRDA DEFAULT MODE				*
		TYPE=0,	NEGOTIABLE BIND				*
		PSNDPAC=X'01',	PRIMARY SEND PACING COUNT				*
		SSNDPAC=X'01',	SECONDARY SEND PACING COUNT				*
		SRCVPAC=X'00',	SECONDARY RECEIVE PACING COUNT				*
		RUSIZES=X'8989',	RUSIZES IN-4K OUT-4K				*
		FMPROF=X'13',	LU6.2 FM PROFILE				*
		TSPROF=X'07',	LU6.2 TS PROFILE				*
		PRIPROT=X'B0',	LU6.2 PRIMARY PROTOCOLS				*
		SECPROT=X'B0',	LU6.2 SECONDARY PROTOCOLS				*
		COMPROT=X'D0B1',	LU6.2 COMMON PROTOCOLS				*
		PSERVIC=X'06020000000000000000122F00'	LU6.2 LU TYPE				
SNASVCMG	MODEENT	LOGMODE=SNASVCMG,	DRDA DEFAULT MODE				*
		PSNDPAC=X'00',	PRIMARY SEND PACING COUNT				*
		SSNDPAC=X'02',	SECONDARY SEND PACING COUNT				*
		SRCVPAC=X'00',	SECONDARY RECEIVE PACING COUNT				*
		RUSIZES=X'8585',	RUSIZES IN-1K OUT-1K				*
		FMPROF=X'13',	LU6.2 FM PROFILE				*
		TSPROF=X'07',	LU6.2 TS PROFILE				*
		PRIPROT=X'B0',	LU6.2 PRIMARY PROTOCOLS				*
		SECPROT=X'B0',	LU6.2 SECONDARY PROTOCOLS				*
		COMPROT=X'D0B1',	LU6.2 COMMON PROTOCOLS				*
		PSERVIC=X'0602000000000000000000300'	LU6.2 LU TYPE				

関連タスク:

- 47 ページの『DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal Database for iSeries の準備』

第 6 章 DB2 Connect 通信のための DB2 UDB for iSeries データベースの準備

DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal Database for iSeries の準備

DB2 Connect を使ってリモート・システムは、DB2 UDB for iSeries システム上のデータにアクセスすることができます。

手順:

その接続をセットアップするには、次の項目を理解している必要があります。

1. ローカル・ネットワーク名。DSPNETA と入力して、この情報を得ることができます。
2. ローカル・アダプター・アドレス。WRKLIND (*trlan) と入力して、この情報を得ることができます。
3. モード名。WRKMODD と入力して、モード名のリストを得ることができます。iSeries システム上でモード IBMRDB が定義されている場合には、それを使用してください。
4. ローカル・コントロール・ポイント名。DSPNETA と入力して、この情報を得ることができます。
5. リモート・トランザクション・プログラム名。デフォルトは X'07'6DB (X'07F6C4C2') です。DB2 UDB for iSeries は常にデフォルトを使用します。16 進数を入力するかわりに、別名 QCNTEDDM を入力できます。
6. リレーショナル・データベース名。DSPRDBDIRE と入力して、この情報を得ることができます。これによりリストが表示されます。リモート・ロケーション列に *LOCAL が含まれている行は、クライアントに定義する必要のある RDBNAME を識別します。*LOCAL 項目がない場合は、サーバー上で DSPNETA コマンドで得られるシステム名を使用するか、新たに追加できます。

例を以下に示します。

リレーショナル・データベースのディレクトリー項目の表示

```

Position to . . . . .
Type options, press Enter.
    5=Display details  6=Print details

          Relational          Remote
Option    Database          Location Text
-----
-         _____
-         DLHX              RCHAS2FA
-         JORMT2FA         JORMT2FA
-         JORMT4FD         JORMT4FD
-         JOSNAR7B         RCHASR7B
-         RCHASR7B         *LOCAL
-         RCHASR7C         RCHASR7C
-         R7BDH3SNA        RCH2PDH3
-         RCHASDH3         RCHASDH3
    
```

iSeries サーバーからこれらのパラメーターを取得したら、次のワークシートに値を入力してください。

表 3. iSeries からの構成パラメーター

項目	パラメーター	例	使用値
A-1	ローカル・ネットワーク名	SPIFNET	
A-2	ローカル・アダプター・アドレス	400009451902	
A-3	モード名	IBMRDB	
A-4	ローカル・コントロール・ポイント名	SYD2101A	
A-5	リモート・トランザクション・プログラム	X'07F6C4C2' (デフォルト)	
A-6	リレーショナル・データベース名	NEW_YORK3	

詳細は、「DRDA (分散関係データベース体系) 接続の手引き」を参照してください。

関連タスク:

- 49 ページの『DB2 Connect からの接続のための DB2 for VSE & VM の準備』

第 7 章 DB2 Connect 通信のための DB2 for VSE and VM データベースの準備

DB2 Connect からの接続のための DB2 for VSE & VM の準備

DB2 Server for VSE & VM をアプリケーション・サーバーとしてセットアップする方法の詳細については、「*DRDA* (分散関係データベース体系) 接続の手引き」を参照してください。

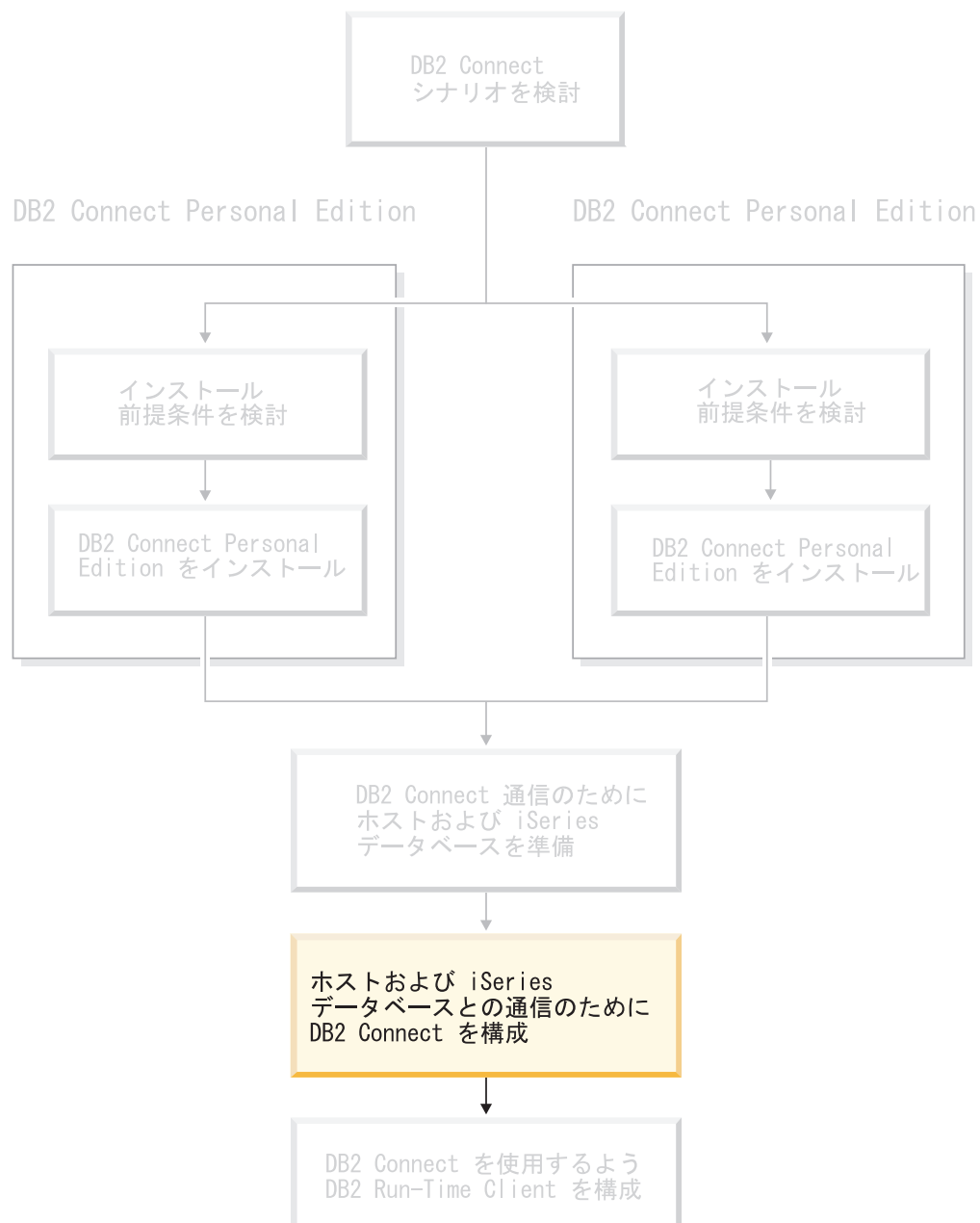
関連概念:

- 「コネクティビティー 補足」の『DB2 for VM』
- 「コネクティビティー 補足」の『DB2 for VSE』

関連タスク:

- 「コネクティビティー 補足」の『DRDA 通信用のアプリケーション・リクエスターまたはアプリケーション・サーバーの準備 (VM)』

第 5 部 ホストおよび iSeries データベースとの通信のための DB2 Connect の構成



第 8 章 ホストおよび iSeries データベースとの通信のための DB2 Connect の構成

CA を使用した、ホストまたは iSeries データベース・サーバーへの接続の構成

このタスクでは、構成アシスタント (CA) を使用して、DB2 Connect Personal Edition (PE) または DB2 Connect Enterprise Edition をリモート・データベースのホストまたは iSeries データベース・サーバーに接続する方法について説明します。構成アシスタントとは、データベース接続およびその他のデータベース設定の構成に使用できる DB2 GUI ツールです。

旧リリースの DB2 では構成アシスタント (CA) は、クライアント構成アシスタント (CCA) という名称でした。

前提条件:

- 構成アシスタントは、DB2 Connect ワークステーションにインストールしなければなりません。DB2 バージョン 8 では構成アシスタントは、DB2 Administration Client および DB2 Application Development Client の一部として利用することができます。
- インバウンド・クライアント要求を受け入れるようにリモート・サーバーを構成する必要があります。デフォルトでは、サーバー・インストール・プログラムは、インバウンド・クライアント接続用のほとんどのプロトコルをサーバー上で検出および構成します。

手順:

CA を使ってデータベースへの接続を構成するには、以下の方法のうちのいずれかを選択します。

- ディスカバリーを使用したデータベースへの接続
- プロファイルを使用したデータベースへの接続
- CA を使用したデータベースへの手動接続

関連タスク:

- 56 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』
- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 54 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』

構成タスク

構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成

接続したいデータベースについての情報がある場合、手動ですべての構成情報を入力することができます。この方法は、コマンド行プロセッサを使用してコマンドを入力するのと類似していますが、パラメーターがグラフィカルに提示されます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

手順:

CA を使用して手動でシステムにデータベースを追加するには、以下の手順に従います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「**選択済み (Selected)**」で、「**ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)**」を選択します。
4. 「**データベースへの接続を手動で構成する (Manually configure a connection to a database)**」ラジオ・ボタンを選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。
5. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用している場合には、DB2 ディレクトリーを保持したい場所に対応するラジオ・ボタンを選択します。「**次へ (Next)**」をクリックします。
6. 「**プロトコル (Protocol)**」リストから、使用したいプロトコルに対応するラジオ・ボタンを選択します。

ご使用のシステムに DB2 Connect がインストールされており、TCP/IP または APPC を選択する場合には、「**データベースはホストまたは OS/400 システムに物理的に常駐 (The database physically resides on a host or OS/400 system)**」を選択できます。このチェック・ボックスを選択すると、ホストまたは OS/400 に確立したい接続のタイプを選択できます。

- DB2 Connect ゲートウェイ経由の接続を確立するには、「**ゲートウェイ経由でサーバーに接続 (Connect to the server via the gateway)**」ラジオ・ボタンを選択します。
 - 直接接続を確立するには、「**サーバーに直接接続 (Connect directly to the server)**」ラジオ・ボタンを選択します。
- 「**次へ (Next)**」をクリックします。

7. 必要な通信プロトコル・パラメーターを入力し、「次へ (Next)」をクリックします。
8. 追加したいリモート・データベースのデータベース別名を「データベース名 (Database name)」フィールドに入力し、ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力します。

ホストまたは OS/400 データベースを追加している場合、OS/390 または z/OS データベースのロケーション名、OS/400 データベースの RDB 名、または VSE か VM データベースの DBNAME を「データベース名 (Database name)」フィールドに入力します。さらにオプションとして、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力できます。

「次へ (Next)」をクリックします。

9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていないとなりません。
10. 「ノード・オプションの指定 (Specify the node options)」ウィンドウで、オペレーティング・システムを選択して、接続したいデータベース・システムのリモート・インスタンス名を入力します。
11. 「システム・オプションの指定 (Specify the system options)」ウィンドウで、システム名、ホスト名、およびオペレーティング・システムが正しいかどうかを確認します。オプションで、注釈を入力することができます。「次へ (Next)」をクリックします。
12. 「セキュリティ・オプションの指定 (Specify the security options)」ウィンドウで、認証に使用されるセキュリティ・オプションを指定します。
13. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。メニューから「終了 (Exit)」を選択して、CA を閉じます。

関連タスク:

- 56 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』
- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 58 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

プロファイルを使用したデータベース接続の構成

サーバー・プロファイルには、システム上のサーバー・インスタンス、およびそれぞれのサーバー・インスタンスのデータベースについての情報が含まれています。クライアント・プロファイルには、別のクライアント・システム上にカタログが作成されているデータベース情報が含まれています。

サーバー・プロファイルを使用して 1 つのデータベースに接続するには、下記のようにします。同時に複数のデータベースへの接続を構成する場合は、構成アシスタント (CA) のインポート機能を使用する必要があります。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。

- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

手順:

プロファイルを使用してデータベース接続を構成するには、次の手順に従います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「**選択済み (Selected)**」で、「**ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)**」を選択します。
4. 「**プロファイルを使用する (Use a profile)**」ラジオ・ボタンを選択し、「**次へ (Next)**」をクリックします。
5. 「**...**」をクリックして、プロファイルを選択します。
6. 「**ロード (Load)**」をクリックして、プロファイル内のデータベースを選択します。
7. 「**次へ (Next)**」をクリックします。
8. ローカル・データベース別名を「**データベース別名 (Database alias)**」フィールドに入力し、このデータベースについて記述する注釈を「**注釈 (Comment)**」フィールドに入力します。「**次へ (Next)**」をクリックします。
9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録する必要があります。「**ODBC 用にこのデータベースを登録 (Register this database for ODBC)**」チェック・ボックスを選択します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
10. 「**完了 (Finish)**」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。

関連タスク:

- 69 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 70 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

ディスカバリーによるデータベース接続の構成

構成アシスタントのディスカバリー機能を使うと、ネットワークでデータベースを検索できます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

制限:

以下の場合、ディスカバリー機能はリモート・システムを検出できない可能性があります。

- Administration Server がリモート・システムで稼働していない。
- ディスカバリー機能がタイムアウトになっている。デフォルトでは、ディスカバリー機能は 10 秒間ネットワークを検索します。これは、リモート・システムを検出するために十分でない場合があります。DB2DISCOVERYTIME レジストリ変数を指定して、長い時間を指定することができます。
- ディスカバリー機能の実行されるネットワークが指定されていて、特定のリモート・システムにディスカバリー要求が到達しない。

制限:

CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

手順:

ディスカバリーを使用してシステムにデータベースを追加するには、以下の手順に従います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)」を選択します。「データベースの追加 (Add Database)」ウィザードがオープンします。
4. 「ネットワークの検索 (Search the network)」ラジオ・ボタンを使用して、「次へ (Next)」をクリックします。
5. 「既知のシステム (Known Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。クライアントに認識されているすべてのシステムのリストが表示されます。「その他のシステム (Other Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。ネットワーク上のすべてのシステムのリストが表示されます。
6. インスタンスとデータベースのリストを展開して、追加したいデータベースを選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
7. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。
8. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
9. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、追加したデータベースを使用できるようになります。「クローズ (Close)」をクリックして、CA を終了します。

関連タスク:

- 54 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 58 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

構成アシスタントによるデータベース接続のテスト

クライアント・サーバー間の接続を構成した後、データベース接続をテストする必要があります。

手順:

データベース接続をテストするには、

1. 「構成アシスタント」を開始します。
2. 詳細ビューでデータベースを強調表示してから、「選択済み (Selected)」メニュー項目で、「テスト接続 (Test Connection)」を選択します。「テスト接続 (Test Connection)」ウィンドウが表示されます。
3. テストする接続の種類を選択します (デフォルトは **CLI**)。複数のタイプを同時にテストできます。リモート・データベースの有効なユーザー ID およびパスワードを入力し、「テスト接続 (Test Connection)」をクリックします。接続が正常に確立された場合、接続が確立されたことを確認するメッセージが「結果 (Results)」ページに表示されます。

接続検査に失敗した場合には、ヘルプ・メッセージを受け取ります。誤って指定した可能性のある設定を変更するには、詳細ビューでデータベースを選択してから、「選択済み (Selected)」メニュー項目で、「データベースの変更 (Change Database)」を選択します。

関連タスク:

- 56 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』
- 54 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』

各自のアプリケーションの実行

DB2 Application Development Client をインストールすると、DB2[®] アプリケーションを作成および実行することができます。また、DB2 Run-Time Client および DB2 Administration Client 上で DB2 アプリケーションを実行することもできます。

以下のような各種アプリケーションから DB2 データベースにアクセスすることができます。

- 組み込み SQL、API、ストアド・プロシージャ、ユーザー定義の機能、または DB2 CLI の呼び出しを含む DB2 Application Development Client を使用して開発されたアプリケーション。
- Lotus[®] Approach などの ODBC アプリケーション。
- JDBC アプリケーションおよびアプレット。
- HTML および SQL を含む Net.Data[®] マクロ。

Windows[®] オペレーティング・システムでは、以下からも DB2 データベースにアクセスすることができます。

- Microsoft® Visual Basic および Microsoft Visual C++ で実装された ActiveX データ・オブジェクト (ADO)。
- Microsoft Visual Basic で実装されたリモート・データ・オブジェクト (RDO)。
- OLE 自動化ルーチン (UDF およびストアード・プロシージャ)。
- OLE データベース (OLE DB) 表関数。

DB2 クライアントのアプリケーションは、物理的な位置を知らなくてもリモート・データベースにアクセスできます。DB2 クライアントは、データベースのロケーションを判別し、データベース・サーバーへの要求の伝送を管理し、結果を戻します。

データベース・クライアント・アプリケーションを実行する方法は次のとおりです。

1. サーバーが構成され、実行されていることを確認します。
2. DB2 UDB サーバーで、アプリケーション・プログラムが接続されているデータベース・サーバーでデータベース・マネージャーが開始されていることを確認します。開始されていない場合、アプリケーションを開始する前に、サーバーに **db2start** コマンドを出します。
3. アプリケーションが使用するデータベースに接続できることを確認します。
4. データベースにユーティリティとアプリケーションをバインドします。
5. アプリケーション・プログラムを実行します。

関連概念:

- 「アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング」の『DB2 がサポートしているプログラミング・インターフェース』

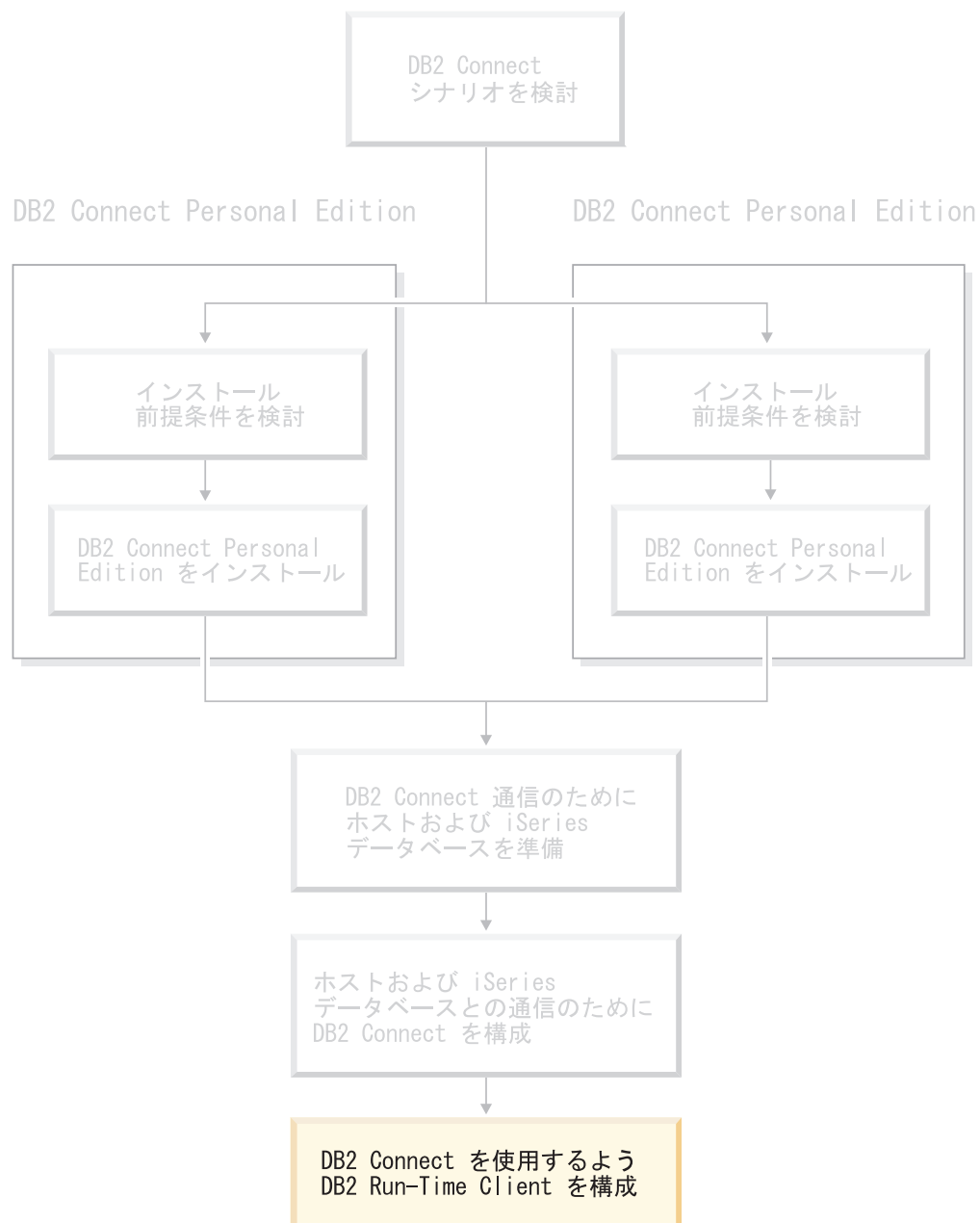
関連タスク:

- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『CLI 環境のセットアップ』
- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『UNIX ODBC 環境のセットアップ』
- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『Windows CLI 環境のセットアップ』

関連資料:

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Application Development Client』

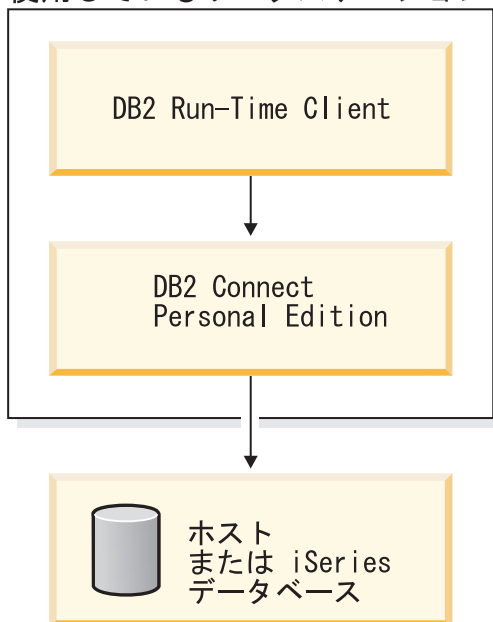
第 6 部 DB2 Connect を使用するための DB2 Run-time Client の構成



第 9 章 DB2 Connect を使用するための DB2 クライアントの構成

DB2 Connect Personal Edition をインストールすると、DB2 Run-Time Client もインストールされます。このセクションでは、DB2 Run-Time Client から DB2 UDB サーバーへの接続を構成する方法を説明します。DB2 Run-Time Client は、DB2 Connect を使用すると、Windows および UNIX 上のデータベース、またはホスト・データベースまたは iSeries データベースに接続することができます。DB2 Connect Personal Edition が DB2 Run-Time Client と同じワークステーションにインストールされている場合、DB2 Connect Personal Edition を使用してホスト・データベースまたは iSeries データベースに直接接続できます。あるいは、DB2 Connect Enterprise Edition サーバー経由で接続することができます。

使用しているワークステーション



構成アシスタント (CA) を使用したクライアント/サーバー間接続の構成

このタスクでは、構成アシスタント (CA) を使用して DB2 クライアントからリモート・データベースに接続する方法を説明します。構成アシスタントは、データベース接続および他のデータベース設定を構成するとき使用する DB2 GUI ツールです。

構成アシスタント (CA) は、DB2 の以前のリリースでは「クライアント構成アシスタント (CCA)」と呼ばれていました。

前提条件:

- 構成アシスタントが DB2 クライアントにインストールされていなければなりません。DB2 バージョン 8 の場合、構成アシスタントは、DB2 Administration Client および DB2 管理開発クライアントの一部としてインストールされています。
- リモート・サーバーが、インバウンド・クライアント要求を受け入れるように構成されていなければなりません。デフォルトでは、サーバー・インストール・プログラムにより、インバウンド・クライアント接続のためにサーバー上のほとんどのプロトコルは自動的に検出および構成されます。

手順:

CA を使用してデータベース接続を構成するには、以下のいずれかを実行します。

- ディスカバリーを使用してデータベースに接続する
- プロファイルを使用してデータベースに接続する
- CA を使用して手動でデータベースに接続する

構成タスク

構成アシスタント (CA) によるデータベース接続の構成

接続したいデータベースについての情報がある場合、手動ですべての構成情報を入力することができます。この方法は、コマンド行プロセッサを介してコマンドを入力するのと類似していますが、パラメーターがグラフィカルに提示されます。

前提条件:

CA を使用してデータベースとの接続を構成する前に、以下の点を確認してください。

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

手順:

CA を使用して手動でシステムにデータベースを追加するには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「**選択済み (Selected)**」で、「**ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add a database using wizard)**」を選択します。
4. 「**データベースへの接続を手動で構成する (Manually configure a connection to a database)**」ラジオ・ボタンを選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。

5. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用している場合には、DB2 ディレクトリーを保持したい場所に対応するラジオ・ボタンを選択します。
「次へ (Next)」をクリックします。
6. 「プロトコル (Protocol)」リストから、使用したいプロトコルに対応するラジオ・ボタンを選択します。

使用しているマシンに DB2 Connect がインストールされており、TCP/IP または APPC を選択する場合には、「データベースはホストまたは OS/400 システムに物理的に常駐 (The database physically resides on a host or OS/400 system)」を選択できます。このチェック・ボックスを選択すると、ホストまたは OS/400 に確立したい接続のタイプを選択するオプションが表示されます。

- DB2 Connect ゲートウェイ経由の接続を確立するには、「ゲートウェイ経由でサーバーに接続 (Connect to the server via the gateway)」ラジオ・ボタンを選択します。
- 直接接続を確立するには、「サーバーに直接接続 (Connect directly to the server)」ラジオ・ボタンを選択します。

「次へ (Next)」をクリックします。

7. 必要な通信プロトコル・パラメーターを入力し、「次へ (Next)」をクリックします。
8. 追加したいリモート・データベースのデータベース別名を「データベース名 (Database name)」フィールドに入力し、ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力します。

ホストまたは OS/400 データベースを追加している場合、OS/390 または z/OS データベースのロケーション名、OS/400 データベースの RDB 名、または VSE か VM データベースの DBNAME を、「データベース名 (Database name)」フィールドに入力します。さらにオプションとして、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。

「次へ (Next)」をクリックします。

9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていないならばなりません。
10. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。メニューから「終了 (Exit)」を選択して、CA を閉じます。

関連タスク:

- 56 ページの『ディスカバリーによるデータベース接続の構成』
- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 58 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

プロファイルを使用したデータベース接続の構成

サーバー・プロファイルには、システム上のサーバー・インスタンス、およびそれぞれのサーバー・インスタンスのデータベースについての情報が含まれています。クライアント・プロファイルには、別のクライアント・システム上にカタログが作

成されているデータベース情報が含まれています。プロファイルを使用してデータベースに接続するには、下記のようにします。

前提条件:

CA により、プロファイルを使用してデータベースに接続する前に、以下の点を確認します。

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

手順:

プロファイルを使用してデータベースに接続するには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add a database using wizard)」を選択します。
4. 「プロファイルを使用する (Use a profile)」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ (Next)」をクリックします。
5. 「...」 ボタンをクリックして、プロファイルを選択します。プロファイルから表示されたオブジェクト・ツリーからリモート・データベースを選択し、選択されたデータベースがゲートウェイ接続の場合には、データベースへの接続経路を選択します。「次へ (Next)」 ボタンをクリックします。
6. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。「次へ (Next)」 をクリックします。
7. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
8. 「完了 (Finish)」 をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。メニューから「終了 (Exit)」 を選択して、CA を閉じます。

関連タスク:

- 69 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 70 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

ディスカバリーによるデータベース接続の構成

構成アシスタントのディスカバリー機能を使うと、ネットワークでデータベースを検索できます。

前提条件:

ディスクバリアーを使用してデータベースとの接続を構成する前に、以下のことを確認してください。

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

制限:

CA のディスクバリアー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

手順:

ディスクバリアーを使用してシステムにデータベースを追加するには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add a database using wizard)」を選択します。
4. 「ネットワークの検索 (Search the network)」ラジオ・ボタンを使用して、「次へ (Next)」をクリックします。
5. 「既知のシステム (Known Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。クライアントに認識されているすべてのシステムのリストが表示されます。
6. システムの横の **[+]** 符号をクリックして、インスタンスおよびそのデータベースのリストを表示します。追加するデータベースを選択し、「次へ (Next)」ボタンをクリックします。
7. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述する注釈を「注釈 (Comment)」フィールドに入力します。
8. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
9. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、追加したデータベースを使用できるようになります。「クローズ (Close)」をクリックして、CA を終了します。

関連タスク:

- 54 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 58 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

データベース接続のテスト

データベースを構成した後、データベース接続をテストする必要があります。

手順:

データベース接続をテストするには、以下のタスクを実行します。

1. **CA** を開始します。
2. 詳細ビューでデータベースを強調表示してから、「**テスト接続 (Test Connection)**」メニュー・アクションを実行します。「テスト接続 (Test Connection)」ウィンドウが表示されます。
3. テストする接続の種類を選択します (デフォルトは **CLI**)。リモート・データベースの有効なユーザー ID およびパスワードを入力し、「**テスト接続 (Test Connection)**」をクリックします。接続が正常に確立された場合、接続が確立されたことを確認するメッセージが「**結果 (Results)**」ページに表示されます。

接続検査に失敗した場合には、ヘルプ・メッセージを受け取ります。誤って指定した設定を変更するには、詳細ビューでデータベースを選択してから、「**データベースの変更 (Change Database)**」メニュー・アクションを実行します。

関連タスク:

- 56 ページの『ディスクバリーによるデータベース接続の構成』
- 54 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』

クライアントおよびサーバー・プロファイルの使用

クライアント・プロファイル

クライアント・プロファイルは DB2® クライアントとサーバーの間のデータベース接続を構成するのに使用します。クライアント・プロファイルは、構成アシスタント (CA) のエクスポート機能を使用するか、**db2cfexp** コマンドを使用して、クライアントで生成されます。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。

選択した設定によって、以下のような情報が組み込まれます。

- データベース接続情報 (CLI または ODBC 設定を含む)
- クライアント設定 (データベース・マネージャーの構成パラメーターおよび DB2 レジストリー変数を含む)
- CLI または ODBC 共通パラメーター
- ローカル NetBIOS 通信サブシステムの構成データ

判別されたクライアント・プロファイル内の情報は、CA のインポート機能を使用するか **db2cfimp** コマンドを使ってプロファイルをインポートすることにより、他のクライアントを構成するのに使用できます。クライアントは、既存のプロファイル中にある構成情報の全体またはサブセットをインポートできます。

関連タスク:

- 72 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 69 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 70 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfimp - 接続構成インポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfexp - 接続構成エクスポート・ツール・コマンド』

構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート

クライアント・プロファイルは、DB2 クライアントとサーバーの間の接続を作成するとき 사용됩니다。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。クライアント・プロファイル内の情報は判別されると、インポート処理を使用して、他のクライアントの構成に使用できます。

手順:

構成アシスタント (CA) のエクスポート機能を使用してクライアント・プロファイルを作成するには、次の手順に従います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. 「構成 (Configure)」メニューから、「プロファイルのエクスポート (Export Profile)」を選択します。
4. 以下のオプションから 1 つを選択してください。

すべて (All)

システムでカタログされたすべてのデータベース、およびこのクライアントのすべての構成情報を含むプロファイルを作成したい場合を選択します。クライアント・プロファイルの名前を入力して、「保管 (Save)」をクリックします。

データベース接続 (Database Connections)

システムでカタログされたすべてのデータベースを含み、このクライアントのすべての構成情報を含まないプロファイルを作成したい場合を選択します。クライアント・プロファイルの名前を入力して、「保管 (Save)」をクリックします。

カスタマイズ (Customize)

システムでカタログされたデータベースのサブセット、またはこのクライアントの構成情報のサブセットを選択したい場合を選択します。「プ

ロファイルのエクスポートのカスタマイズ (**Customize Export Profile**)」ウィンドウで、次のようにします。

- a. クライアント・プロファイルの名前を入力します。
- b. 「データベース接続 (**Database connections**)」チェック・ボックスを選択して、エクスポートするクライアント・プロファイルにデータベース接続を含めます。
- c. 「使用可能なデータベース別名 (**Available database aliases**)」ボックスからエクスポートするデータベースを選択して、「>」をクリックします。すると、それらのデータベースが「**選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)**」ボックスに追加されます。使用可能なすべてのデータベースを「**選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)**」ボックスに追加するには、「>>」をクリックします。
- d. ターゲット・クライアント用に設定したいオプションに対応するチェック・ボックスを選択します。
- e. 「エクスポート (**Export**)」をクリックします。これで作業は完了です。
- f. 「結果 (**Results**)」タブに表示される結果を確認します。

このタスクを完了した後は、作成したクライアント・プロファイルを使用して、インポート機能によって他のクライアントを構成できます。

関連概念:

- 68 ページの『クライアント・プロファイル』

関連タスク:

- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 72 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 70 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成

クライアント・プロファイルは、DB2 クライアントとサーバーの間の接続を作成するとき 사용됩니다。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。クライアント・プロファイル内の情報は判別されると、インポート処理を使用することにより、他のクライアントの構成に使用できます。

「データベースの追加 (**Add Database**)」ウィザードではなく、構成アシスタントのプロファイルのインポート機能を使用すると、複数のデータベースの接続情報をインポートできます。「データベースの追加 (**Add Database**)」ウィザードでは、一度に 1 つのデータベースしか追加できません。

手順:

構成アシスタント (CA) を使用してクライアント・プロファイルを構成するには、次の手順に従います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. 「構成 (Configure)」メニューから、「プロファイルのインポート (Import Profile)」を選択します。
4. 以下のインポート・オプションから 1 つを選択してください。クライアント・プロファイル中の情報すべてまたはサブセットのインポートを選択できます。

すべて (All)

クライアント・プロファイル内のすべてをインポートするには、このオプションを選択します。インポートしたいクライアント・プロファイルを開きます。インポートの結果を示す DB2 メッセージが表示されます。

カスタマイズ (Customize)

クライアント・プロファイルで定義される特定のデータベースまたは設定をインポートするには、このオプションを選択します。「**プロファイルのインポートのカスタマイズ (Customize Import Profile)**」ウィンドウで、次のようにします。

- a. インポートしたいクライアント・プロファイルを選択して、「**ロード (Load)**」をクリックします。
- b. 「**使用可能なデータベース別名 (Available database aliases)**」ボックスからインポートするデータベースを選択して、「>」をクリックします。すると、それらのデータベースが「**選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)**」ボックスに追加されます。使用可能なすべてのデータベースを「**選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)**」ボックスに追加するには、「>>」をクリックします。
- c. カスタマイズしたいオプションに対応するチェック・ボックスを選択します。
- d. 「**インポート (Import)**」をクリックします。これで作業は完了です。
- e. 「**結果 (Results)**」タブに表示される結果を確認します。

関連概念:

- 68 ページの『クライアント・プロファイル』

関連タスク:

- 55 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 72 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 69 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』

プロファイルのエクスポートとインポート

手順:

応答ファイル・生成プログラムによって作成された応答ファイルを使って DB2 製品をインストールする際に、構成プロファイルを使わなかった場合には、**db2cfexp** コマンドを入力することによって、構成プロファイルを作成することができます。後で、**db2cfimp** コマンドを使用することにより、構成プロファイルをインポートできます。

また、CA を使用することによって、構成をエクスポートしたりインポートしたりすることもできます。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイル・ジェネレーターについて (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfimp - 接続構成インポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfexp - 接続構成エクスポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

第 7 部 付録

付録 A. 言語サポート

DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)

DB2 のインターフェース言語は、メッセージ、ヘルプ、およびグラフィック・ツール・インターフェースで表示される言語です。DB2 のインストール時に、1 つ以上の言語サポートをインストールするオプションが示されます。インストール後、DB2 のインターフェース言語を、他のインストール済みインターフェース言語の 1 つに変更したい場合には、このタスクで概説されたステップを使用してください。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

前提条件:

使用する DB2 インターフェース言語を、ご使用のシステムにインストールする必要があります。DB2 のインストール時に DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 インターフェース言語を選択しインストールします。DB2 のインターフェース言語を、まだインストールされていない、サポートされるインターフェース言語に変更する場合には、デフォルトではまず最初に DB2 インターフェース言語をオペレーティング・システムの言語に設定します。それがサポートされない場合には、英語に設定します。

手順:

Windows 上で DB2 のインターフェース言語を変更するには、ご使用の Windows オペレーティング・システムのデフォルトの言語設定を変更する必要があります。

次のようにして、Windows 上で DB2 インターフェース言語を変更します。

1. ご使用の Windows オペレーティング・システムのコントロール パネルで、「**地域 (Regional Options)**」を選択します。
2. 「**地域 (Regional Option)**」ダイアログ・ウィンドウで、システムのデフォルトの言語設定を、DB2 でインターフェースさせる言語に変更します。

ご使用のオペレーティング・システムのヘルプを参照して、デフォルトのシステム言語の変更についての追加情報を参照してください。

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリー・コードおよびコード・ページ』
- 76 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』

DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)

DB2 のインターフェース言語は、メッセージ、ヘルプ、およびグラフィック・ツール・インターフェースで表示される言語です。DB2 のインストール時に、1 つ以上の言語サポートをインストールするオプションが示されます。インストール後、DB2 のインターフェース言語を、他のインストール済みインターフェース言語の 1 つに変更したい場合には、このタスクで概説されたステップを使用してください。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

前提条件:

使用する DB2 インターフェース言語のサポートを、ご使用のシステムにインストールする必要があります。DB2 インターフェース言語サポートは、DB2 のインストール時に DB2 セットアップ・ウィザードを使用して選択し、インストールします。DB2 のインターフェース言語を、まだインストールされていない、サポートされるインターフェース言語に変更する場合には、デフォルトではまず最初に DB2 インターフェース言語をオペレーティング・システムの言語に設定します。それがサポートされない場合には、英語に設定します。

手順:

UNIX システムで DB2 インターフェース言語を変更するには、LANG 環境変数を希望のロケールに設定します。

たとえば、DB2 for AIX でフランス語を使用して DB2 にインターフェースするには、フランス語言語サポートをインストールして、LANG 環境変数をフランス語ロケール (たとえば fr_FR) に設定する必要があります。

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリリー・コードおよびコード・ページ』
- 76 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』

サポートされる DB2 インターフェース言語

DB2 インターフェースの DB2 言語サポートは、サーバー・グループの言語とクライアント・グループの言語に分類されます。サーバー・グループの言語は、ほとんどのメッセージ、ヘルプ、および DB2 グラフィカル・インターフェース・エレメントの翻訳に使用されます。クライアント・グループの言語は、DB2 ランタイム・クライアント・コンポーネントの翻訳に使用されますが、これにはほとんどのメッセージと特定のヘルプ文書が含まれます。

サーバー・グループの言語には、ブラジル・ポルトガル語、チェコ語、デンマーク語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、ノル

ウェー語、ポーランド語、ロシア語、中国語 (簡体字)、スペイン語、スウェーデン語、および中国語 (繁体字) が含まれます。

クライアント・グループの言語には、アラビア語、ブルガリア語、クロアチア語、オランダ語、ギリシャ語、ヘブライ語、ハンガリー語、ポルトガル語、ルーマニア語、スロバキア語、スロベニア語、およびトルコ語が含まれます。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 75 ページの『DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)』
- 76 ページの『DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『各国語バージョン』
- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリー・コードおよびコード・ページ』
- 「管理ガイド: プランニング」の『コード・ページ 923 および 924 の変換表』
- 「管理ガイド: プランニング」の『ユーロを使用可能なコード・ページ遷移表ファイル』

別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID

DB2 セットアップ・ウィザードを、ご使用のコンピューターのデフォルトの言語以外の言語で実行する場合には、言語 ID を指定して、手動で DB2 セットアップ・ウィザードを開始することができます。指定する言語は、インストールを実行するプラットフォームで選択可能なものでなければなりません。

表 4. 言語 ID

言語	言語 ID
アラビア語	ar
ブラジル・ポルトガル語	br
ブルガリア語	bg
中国語 (簡体字)	cn
中国語 (繁体字)	tw
クロアチア語	hr
チェコ語	cz
デンマーク語	dk
オランダ語	nl
英語	en
フィンランド語	fi

表 4. 言語 ID (続き)

言語	言語 ID
フランス語	fr
ドイツ語	de
ギリシャ語	el
ヘブライ語	iw
ハンガリー語	hu
イタリア語	it
日本語	jp
韓国語	kr
ノルウェー語	no
ポーランド語	pl
ポルトガル語	pt
ルーマニア語	ro
ロシア語	ru
スロバキア語	sk
スロベニア語	sl
スペイン語	es
スウェーデン語	se
トルコ語	tr

文字データの変換

文字データがマシン間で転送されるときは、受信する側のマシンが使用できる形に変換されなければなりません。

たとえば、データが DB2 Connect サーバーとホストまたは iSeries™ データベース・サーバーとの間で転送される場合、データは通常、サーバー・コード・ページからホスト CCSID へ (およびその逆に) 変換されます。2 つのマシンが異なるコード・ページまたは CCSID を使用している場合、コード・ポイントは 1 つのコード・ページまたは CCSID から別のものへとマップします。この変換は、常に受信側で実行されます。

データベースへ送られる文字データは、SQL ステートメントと入力データから成ります。データベースから送られる文字データは、出力データから成ります。ビット・データとして解釈される出力データは変換されません。たとえば、FOR BIT DATA 文節で宣言された列のデータがそうです。その他の場合は、すべての入力および出力の文字データは、2 つのマシンが異なるコード・ページまたは CCSID を持つときは変換されます。

たとえば、DB2 Connect を使用して DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 データにアクセスすると、次のことが起こります。

1. DB2® Connect は、OS/390® または z/OS に SQL ステートメントと入力データを送信します。

2. DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 は、それらを EBCDIC CCSID に変換して処理します。
3. DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 は、結果を DB2 Connect サーバーに戻します。
4. DB2 Connect™ は、結果を ASCII または ISO コード・ページに変換してそれをユーザーに戻します。

以下の表は、コード・ページ (DB2 Connect サーバー側) と CCSID (ホストまたは iSeries 側) との間でサポートされている変換を示します。

表 5. サーバー・コード・ページからホストまたは iSeries の CCSID への変換

ホスト CCSID	コード・ページ	テリトリー
037、273、277、278、280、 284、285、297、500、871、 1140 から 1149	437、819、850、858、860、 863、1004、1051、1252、 1275	アルバニア、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、アイスランド、アイルランド、イタリア、ラテンアメリカ、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、ポルトガル、南アフリカ、スペイン、スウェーデン、スイス、英国、米国
423、875	737、813、869、1253、1280	ギリシャ
870	852、912、920 ⁴ 、1250、1282	クロアチア、チェコ共和国、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、セルビア/モンテネグロ (ローマ字)、スロバキア、スロベニア
1025	855、866、915、1251、1283	ブルガリア、FYR マケドニア、ロシア、セルビア/モンテネグロ (キリル文字)
1026	857、920、1254、1281	トルコ
424	862、916、1255	イスラエル ³
420	864、1046、1089、1256	アラブ諸国 ³
838	874	タイ
930、939、5026、5035	932、942、943、954、5039	日本
937	938、948、950、964	台湾
933、1364	949、970、1363	韓国
935、1388	1381、1383、1386	中華人民共和国
1112、1122	921、922	エストニア、ラトビア、リトアニア
1025	915、1131、1251、1283	ベラルーシ
1123	1124、1125、1251	ウクライナ

注:

1. コード・ページ 1004 はコード・ページ 1252 としてサポートされます。

2. 一般に、データは、コード・ページから CCSID へ変換することができ、再度元へ戻してもなんら変化はありません。以下は、その規則に対する例外です。
 - 2 バイト文字セット (DBCS) コード・ページにおいて、ユーザー定義の文字を含むいくつかのデータは失われる可能性があります。
 - 混合バイトのコード・ページ内で定義された単一バイト・コード・ページと新規のいくつかの単一バイト・コード・ページの場合、ソース、ターゲットの両方に存在していない文字は、置換文字へマップされてから、データが元のコード・ページへ再変換される時に失われる可能性があります。
3. 双方向言語の場合は、特殊な "BiDi CCSIDS" が IBM® によっていくつか定義されており、DB2 Connect でサポートされています。

データベース・サーバーの双方向属性がクライアントの属性と異なっている場合は、これらの特殊な CCSIDS を使ってこの相違を解決できます。

これらの属性をホストまたは iSeries 接続用に設定する方法の詳細は、DB2 Connect のリリース情報を参照してください。

4. このコード・ページは VM システムではサポートされていません。

関連概念:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『文字変換のガイドライン』

付録 B. DB2 Universal Database 技術情報

DB2 資料およびヘルプ

DB2 テクニカル情報は、以下のツールや方法を使用して利用できます。

- DB2 インフォメーション・センター
 - トピック
 - DB2 ツールのヘルプ
 - サンプル・プログラム
 - チュートリアル
- ダウンロード可能な PDF ファイル、CD 上の PDF ファイル、および印刷資料
 - ガイド
 - リファレンス・マニュアル
- コマンド行ヘルプ
 - コマンド・ヘルプ
 - メッセージ・ヘルプ
 - SQL ステートメント・ヘルプ
- インストールされたソース・コード
 - サンプル・プログラム

技術情報、白書、および Redbooks など、他の DB2 Universal Database テクニカル情報には、ibm.com でオンラインでアクセスできます。

www.ibm.com/software/data/db2/udb/support.html の、DB2 Information Management Library サイトにアクセスしてください。

DB2 資料の更新

IBM では、利用可能な DB2 インフォメーション・センターに対して、定期的に資料の FixPak を作成したり、他の資料更新を行ったりすることがあります。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> で DB2 インフォメーション・センターにアクセスする場合、常に最新の情報が示されます。DB2 インフォメーション・センターをローカルにインストールした場合、表示する前に、更新を手動でインストールする必要があります。資料更新では、新しい情報が利用可能になったときに、DB2 インフォメーション・センター CD でインストールした情報を更新できます。

インフォメーション・センターは、PDF またはハードコピー・ブックよりも頻繁に更新されます。最新の DB2 テクニカル情報を入手するには、資料更新が利用可能になったらすぐにインストールするか、www.ibm.com サイトで DB2 インフォメーション・センターにアクセスしてください。

関連概念:

- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『CLI サンプル・プログラム』

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Java サンプル・プログラム』
- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 103 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 94 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 104 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 105 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 105 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 95 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 インフォメーション・センター

DB2[®] インフォメーション・センターを使用すると、DB2 Universal Database[™]、DB2 Connect[™]、DB2 Information Integrator および DB2 Query Patroller[™] などの DB2 ファミリー製品を最大限に活用するのに必要なすべての情報にアクセスできます。また、DB2 インフォメーション・センターは、DB2 の主な機能とコンポーネントに関する情報を提供します (レプリケーション、データウェアハウジング、および DB2 の種々の Extender など)。

Mozilla 1.0 以上または Microsoft[®] Internet Explorer 5.5 以上で表示する場合、DB2 インフォメーション・センターには以下の機能があります。以下のいくつかの機能では、JavaScript[™] のサポートを使用可能にする必要があります:

柔軟なインストール・オプション

以下の中から、ご使用の環境に最も適したオプションを使って DB2 資料を表示できます。

- 最新の資料を常に自動的に利用できるようにするには、IBM[®] の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターからすべての資料に直接アクセスします。
- 更新処理を最小化し、イントラネット内のネットワーク・トラフィックだけに制限するには、イントラネット上の 1 つのサーバーに DB2 資料をインストールします。
- 柔軟性を改善し、ネットワーク接続への依存を軽減するには、個々のコンピューターに DB2 資料をインストールします。

検索 「検索」テキスト・フィールドに検索語を入力することにより、DB2 インフォメーション・センターのすべてのトピックを検索できます。複数の語句を引用符で囲めば、完全一致を検索できます。また、ワイルドカード演算子 (*、?) とブール演算子 (AND、NOT、OR) を使用して検索を絞り込むことができます。

タスク指向の目次

単一の目次の中から、DB2 資料のトピックを見付けることができます。目

次は、主に実行するタスクの種類に従って編成されていますが、そのほかに製品概要、特定のゴール (目的) の情報、参照情報、索引、および用語集も含まれます。

- 製品概要では、DB2 ファミリーで使用可能な製品間の関係、そうした各製品で提供される機能、および各製品の最新リリース情報について説明されています。
- インストール、管理および開発などのゴール・カテゴリには、タスクを迅速に完了し、そのための背景情報をよく理解できるようにするトピックが含まれています。
- 「参照」トピックでは、その対象に関する詳細な情報 (ステートメントとコマンドの構文、メッセージ・ヘルプ、構成パラメーターなど) が説明されています。

現在のトピックを目次に表示する

現在のトピックが目次のどの部分に該当するかを表示するには、目次フレーム内の「リフレッシュ/現在のトピックの表示 (Refresh/Show Current Topic)」ボタンをクリックするか、コンテンツ・フレーム内の「目次に表示 (Show in Table of Contents)」ボタンをクリックします。幾つかのファイルで関連トピックへの複数のリンクをたどった場合、または検索結果からトピックにアクセスした場合には、この機能が役立ちます。

索引 索引から、すべての資料にアクセスすることができます。索引では、用語が 50 音順に編成されています。

用語集 用語集を見れば、DB2 資料で使われているさまざまな用語の定義を調べることができます。用語集では、用語が 50 音順に編成されています。

組み込まれているローカライズ情報

DB2 インフォメーション・センターは、ブラウザで設定された言語でトピックを表示します。設定された言語のトピックが利用できない場合、DB2 インフォメーション・センターにはそのトピックの英語版が表示されます。

iSeries™ 技術情報については、IBM eServer™ iSeries Information Center (www.ibm.com/eserver/series/infocenter/) を参照してください。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 94 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 95 ページの『DB2 インフォメーション・センターでの希望する言語でのトピックの表示』
- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 90 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ

異なる作業環境のユーザーは、それぞれの環境に適した方法で DB2 製品資料にアクセスする必要があります。そのため、DB2 製品資料は、3 つの方法で、すなわち IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはコンピューターにインストールされたバージョンからアクセスできます。3 つのケースすべてで、資料は DB2 インフォメーション・センターに収められています。これは、ブラウザで表示できるトピック・ベースの情報として設計したものです。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイトから DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。しかし、イントラネット・サーバーまたは自分のコンピューターから DB2 インフォメーション・センターにアクセスする場合、製品 Media Pack の DB2 インフォメーション・センター CD を使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールする必要があります。各ユーザーおよびその作業環境で最適な DB2 インフォメーション・センターへのアクセス方法の判別、考慮しなければならない可能性のあるインストール上の問題の判別に役立つ、以下の 3 つのシナリオを使用してください。

シナリオ: IBM Web サイトで DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

Colin は、トレーニング・ファームの IT コンサルタントです。彼の専門はデータベース・テクノロジーと SQL であり、DB2 Universal Database Express Edition を使用して、これらの概念をビジネスに応用することについてのセミナーを北アメリカ全域で展開しています。Colin のセミナーの一部には、DB2 資料をティーチング・ツールとして使用することが関係します。たとえば、SQL についてのティーチング・コースでは、SQL についての DB2 資料を、データベース照会の基本構文と応用構文を教えるための 1 つの手段として使用します。

Colin が教えるほとんどのビジネスには、インターネットへのアクセスが関係します。このことを考慮して、Colin は、最新バージョンの DB2 Universal Database Express Edition をインストールした際に、IBM Web サイトの DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるよう、自分のモバイル・コンピューターを構成しました。この構成のおかげで、セミナーの際にオンラインで最新の DB2 資料へアクセスできるようになりました。

しかし、旅行中には、インターネットへアクセスできないこともあります。このことは、特にセミナーの準備で DB2 資料にアクセスする必要があった場合に問題となりました。このような状況を避けるため、自分のモバイル・コンピューターに、DB2 インフォメーション・センターのコピーをインストールしました。

Colin は、DB2 資料のコピーをいつでも自由に使えるという柔軟性に満足しています。**db2set** コマンドを使用することで、モバイル・コンピューターのレジストリ変数を簡単に変更できるので、状況に応じて、IBM Web サイトまたは自分のモバイル・コンピューターの DB2 インフォメーション・センターへアクセスできます。

シナリオ: イントラネット・サーバーで DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

Eva は、生命保険会社の上級データベース管理者として働いています。彼女の担当業務には、会社の UNIX データベース・サーバーで、最新バージョンの DB2 Universal Database Enterprise Server Edition をインストールして構成することが含まれます。最近この会社では、従業員に対して、セキュリティ上の理由で、仕事上のインターネットへのアクセスを禁ずることを通知しました。会社にはネットワーク環境が整えられているため、イントラネット・サーバーに DB2 インフォメーション・センターのコピーをインストールして、通常の業務で会社のデータウェアハウスを使用している社内のすべての従業員（営業担当員、セールス・マネージャー、ビジネス・アナリスト）が、DB2 資料へアクセスできるようにすることを決定します。

DB2 インフォメーション・センターをイントラネット・サーバーへインストールしていると、DB2 セットアップ・ウィザードにより、ネットワーク上の他のコンピューターからの着信通信を受信するときに DB2 インフォメーション・センターが使用するポートを指定するよう求められます。彼女は、DB2 インフォメーション・センターをインストールしているイントラネット・サーバーのサービス名とポート番号を指定します。

次に、自分のデータベース・チームに対し、応答ファイルを使用して全従業員のコンピューターに最新バージョンの DB2 Universal Database をインストールするよう指示を出し、各コンピューターを、イントラネット・サーバーのホスト名とポート番号を使用して DB2 インフォメーション・センターへアクセスするよう構成しました。

しかし、Eva のチームの下級データベース管理者である Miguel が作業内容を誤解していて、DB2 インフォメーション・センターのコピーを一部の従業員のコンピューターだけにインストールしたため、イントラネット・サーバーで DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるように DB2 Universal Database が構成されていません。この状況を解決するために、Eva は、**db2set** コマンドを使用して、各コンピューターの DB2 インフォメーション・センターのレジストリー変数（ホスト名は DB2_DOCHOST、ポート番号は DB2_DOCPORT）を変更するように Miguel に指示を出します。これで、ネットワークの該当コンピューターすべてで DB2 インフォメーション・センターにアクセスできるようになり、従業員は、DB2 に関する質問の答えを DB2 資料の中で検索できるようになりました。

シナリオ: 使用しているコンピューターで DB2 インフォメーション・センターにアクセスする:

Tsu-Chen は、インターネット・アクセスを提供するローカル ISP のない小さな町に工場を所有しています。彼は、在庫、商品注文、銀行口座情報、そして仕事上の経費を管理するために、DB2 Universal Database Personal Edition を購入しました。以前に DB2 製品を使用したことがなかったので、DB2 製品資料で使い方を学習する必要があります。

通常インストール・オプションを使用して DB2 Universal Database Personal Edition をコンピューターにインストールした後、DB2 資料にアクセスしようとしています。しかし、使用しているブラウザーに、オープンしようとしたページが見付からないというエラー・メッセージが示されます。DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール を調べると、コンピューターで DB2 資料にアクセスする

には、DB2 インフォメーション・センターをインストールしなければならないことが分かりました。Media Pack の中に DB2 インフォメーション・センター CD を見付け、インストールします。

Tsu-Chen は、使用しているオペレーティング・システムのアプリケーション・ランチャーから DB2 インフォメーション・センターへアクセスできるようになり、ビジネスの成功を増し加える DB2 製品の使用方法を学習できるようになります。

DB2 資料にアクセスする際のオプションのサマリー:

次の表には、DB2 インフォメーション・センターの DB2 製品資料にアクセスする際の、それぞれの作業環境でオプションを最大限に生かすための推奨事項が示されています。

インターネット・アクセス	イントラネット・アクセス	推奨事項
あり	あり	IBM Web サイトで DB2 インフォメーション・センターにアクセスするか、イントラネット・サーバーにインストールされた DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。
あり	なし	IBM Web サイトで DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。
なし	あり	イントラネット・サーバーにインストールされた DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。
なし	なし	ローカル・コンピューターの DB2 インフォメーション・センターにアクセスします。

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 94 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 90 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)

DB2 製品資料は、3 つの方法で、すなわち IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはコンピューターにインストールされたバージョンからアクセスできます。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイトから DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーまたは自分のコンピューターから DB2 資料にアクセスする場合、DB2 インフォメーション・センター CD から資料をインストールする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用すると、インストールの設定を定義して、UNIX オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。

前提条件:

このセクションでは、DB2 インフォメーション・センターを UNIX コンピューターにインストールする際の、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の要件をリストします。

• ハードウェア要件

以下のプロセッサのいずれかが必要です。

- PowerPC (AIX)
- HP 9000 (HP-UX)
- Intel 32 ビット (Linux)
- Solaris UltraSPARC コンピューター (Solaris オペレーティング環境)

• オペレーティング・システムの要件

以下のオペレーティング・システムのいずれかが必要です。

- IBM AIX 5.1 (PowerPC 上)
- HP-UX 11i (HP 9000 上)
- Red Hat Linux 8.0 (Intel 32 ビット上)
- SuSE Linux 8.1 (Intel 32 ビット上)
- Sun Solaris バージョン 8 (Solaris オペレーティング環境 UltraSPARC コンピューター上)

注: DB2 インフォメーション・センターは、DB2 クライアントがサポートされるすべての UNIX オペレーティング・システムで公式にサポートされているわけではありません。そのため、DB2 インフォメーション・センターは、IBM Web サイトからアクセスするか、DB2 インフォメーション・センターをイントラネット・サーバーにインストールしてアクセスすることをお勧めします。

• ソフトウェア要件

- 以下のブラウザがサポートされています。
 - Mozilla バージョン 1.0 以降

• DB2 セットアップ・ウィザードは、グラフィカルなインストーラーです。それぞれのコンピューターで DB2 セットアップ・ウィザードを実行するために、グラフィカル・ユーザー・インターフェースをレンダリングできる X Window システム

ム・ソフトウェアを実装する必要があります。 DB2 セットアップ・ウィザードを実行する前に、表示を適切にエクスポートする必要があります。たとえば、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
export DISPLAY=9.26.163.144:0.
```

- 通信要件

- TCP/IP

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、以下のようにします。

1. システムにログオンします。
2. DB2 インフォメーション・センターの製品 CD をシステムに挿入してマウントします。
3. 次のコマンドを入力することによって、CD がマウントされているディレクトリに移動します。

```
cd /cd
```

ただし、`/cd` は CD のマウント・ポイントを表します。

4. **`/db2setup`** コマンドを入力して「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードを開始します。
5. IBM DB2 セットアップ・ランチパッドがオープンします。 DB2 インフォメーション・センターのインストールへすぐに進むには、「製品のインストール (Install Product)」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックします。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。
6. 「インストールする製品の選択 (Select the product you would like to install)」ページで、「次へ」をクリックします。
7. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ (Welcome to the DB2 Setup wizard)」ページで、「次へ」をクリックします。 DB2 セットアップ・ウィザードが、プログラムのセットアップ処理をガイドします。
8. インストールを続けるには、使用許諾契約書を受け入れる必要があります。「使用許諾契約書 (License Agreement)」ページで、「使用条件の条項に同意します。」を選択して、「次へ」をクリックします。
9. 「インストール・アクションの選択 (Select the installation action)」ページで、「このコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。応答ファイルを使用して、後でこのコンピューターか別のコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールする場合、「設定を応答ファイルに保管 (Save your settings in a response file)」を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
10. 「インストールする言語の選択 (Select the languages to install)」ページで、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。

11. 「**DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定 (Specify the DB2 Information Center port)**」 ページで、着信通信について DB2 インフォメーション・センターを構成します。「次へ」をクリックして、インストールを続けます。
12. 「**ファイルのコピー開始 (Start copying files)**」 ページで、選択したインストール選択項目を確認します。設定を変更する場合は、「戻る」をクリックします。DB2 インフォメーション・センター・ファイルをコンピューターにコピーするには、「インストール」をクリックします。

応答ファイルを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールすることもできます。

インストール・ログ db2setup.his、db2setup.log、および db2setup.err は、デフォルトで、/tmp ディレクトリにあります。ログ・ファイルの場所を指定できません。

db2setup.log ファイルは、エラーを含め、すべての DB2 製品インストール情報を収集します。db2setup.his ファイルは、使用しているコンピューター上のすべての DB2 製品のインストールを記録します。DB2 は、db2setup.log ファイルを db2setup.his ファイルに追加します。db2setup.err ファイルは、Java によって戻されるエラー出力、たとえば、例外およびトラップ情報を収集します。

インストールが完了すると、使用している UNIX オペレーティング・システムに応じて、DB2 インフォメーション・センターが以下のいずれかのディレクトリにインストールされます。

- AIX: /usr/opt/db2_08_01
- HP-UX: /opt/IBM/db2/V8.1
- Linux: /opt/IBM/db2/V8.1
- Solaris オペレーティング環境: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』
- 94 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 95 ページの『DB2 インフォメーション・センターでの希望する言語でのトピックの表示』
- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 90 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)

DB2 製品資料は、3 つの方法で、すなわち IBM Web サイト、イントラネット・サーバー、またはコンピューターにインストールされたバージョンからアクセスできます。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイトから DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーまたは自分のコンピューターから DB2 資料にアクセスする場合、DB2 インフォメーション・センター CD から DB2 資料をインストールする必要があります。DB2 セットアップ・ウィザードを使用すると、インストールの設定を定義して、Windows オペレーティング・システムを使用するコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。

前提条件:

このセクションでは、DB2 インフォメーション・センターを Windows にインストールする際の、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の要件をリストします。

• ハードウェア要件

以下のプロセッサのいずれかが必要です。

- 32 ビット・コンピューター: Pentium または Pentium 互換 CPU

• オペレーティング・システムの要件

以下のオペレーティング・システムのいずれかが必要です。

- Windows 2000
- Windows XP

注: DB2 インフォメーション・センターは、DB2 クライアントがサポートされるすべての Windows オペレーティング・システムで公式にサポートされているわけではありません。そのため、DB2 インフォメーション・センターは、IBM Web サイトからアクセスするか、DB2 インフォメーション・センターをインターネット・サーバーにインストールしてアクセスすることをお勧めします。

• ソフトウェア要件

- 以下のブラウザがサポートされています。
 - Mozilla 1.0 以降
 - Internet Explorer バージョン 5.5 または 6.0 (Windows XP ではバージョン 6.0)

• 通信要件

- TCP/IP

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールするには、以下のようにします。

1. DB2 インフォメーション・センターのインストール用に定義したアカウントで、システムにログオンします。

2. CD をドライブに挿入します。使用可能になっていれば、自動実行機能によって IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが始動します。
3. 「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを英語以外の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動開始しない場合、「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードを手動で始動することができます。

手動で「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードを始動するには、以下のタスクを実行します。

- a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 「開く」フィールドで、次のコマンドを入力します。

```
x:\setup language
```

ただし、*x:* は CD ドライブを表し、*language* はセットアップ・プログラムを実行する言語を表します。

- c. 「OK」をクリックします。
4. IBM DB2 セットアップ・ランチパッドがオープンします。DB2 インフォメーション・センターのインストールへすぐに進むには、「製品のインストール (Install Product)」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックします。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。
5. 「インストールする製品の選択 (Select the product you would like to install)」ページで、「次へ」をクリックします。
6. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ (Welcome to the DB2 Setup wizard)」ページで、「次へ」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードが、プログラムのセットアップ処理をガイドします。
7. インストールを続けるには、使用許諾契約書を受け入れる必要があります。「使用許諾契約書 (License Agreement)」ページで、「使用条件の条項に同意します。」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「インストール・アクションの選択 (Select the installation action)」ページで、「このコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。応答ファイルを使用して、後でこのコンピューターか別のコンピューターに DB2 インフォメーション・センターをインストールする場合、「設定を応答ファイルに保管 (Save your settings in a response file)」を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
9. 「インストールする言語の選択 (Select the languages to install)」ページで、DB2 インフォメーション・センターをインストールする言語を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
10. 「DB2 インフォメーション・センター・ポートの指定 (Specify the DB2 Information Center port)」ページで、着信通信について DB2 インフォメーション・センターを構成します。「次へ」をクリックして、インストールを続けます。

11. 「ファイルのコピー開始 (Start copying files)」 ページで、選択したインストール選択項目を確認します。設定を変更する場合は、「戻る」をクリックします。DB2 インフォメーション・センター・ファイルをコンピューターにコピーするには、「インストール」をクリックします。

応答ファイルを使用して DB2 インフォメーション・センターをインストールできます。また、**db2rspgn** コマンドを使用して、既存のインストールを基にして応答ファイルを生成することもできます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、'My Documents'\DB2LOG\ ディレクトリーにある、db2.log および db2wi.log ファイルを参照してください。'My Documents' ディレクトリーの場所は、使用しているコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルは、最新の DB2 インストール情報を収集します。db2.log は、DB2 製品インストールの履歴を収集します。

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』
- 94 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 95 ページの『DB2 インフォメーション・センターでの希望する言語でのトピックの表示』
- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

DB2 インフォメーション・センターの呼び出し

DB2 インフォメーション・センターは、Linux、UNIX、および Windows オペレーティング・システム用の DB2 製品 (DB2 Universal Database、DB2 Connect、DB2 Information Integrator、DB2 Query Patroller など) を使用するために必要なすべての情報を提供します。

DB2 インフォメーション・センターは、以下の場所から呼び出すことができます。

- DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューター
- DB2 インフォメーション・センターがインストールされているイントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューター

- IBM の Web サイト

前提条件:

DB2 インフォメーション・センターを呼び出すための要件は、以下のとおりです。

- オptional: 希望する言語でトピックを表示するようブラウザを構成する
- オptional: コンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを使用するよう DB2 クライアントを構成する

手順:

DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューターから DB2 インフォメーション・センターを呼び出すには、以下のようになります。

- (Windows オペレーティング・システムの)「スタート」メニューから: 「スタート」→「プログラム」→「IBM DB2」→「情報」→「インフォメーション・センター」をクリックします。
- コマンド行プロンプトから:
 - Linux および UNIX オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs** コマンドを発行します。
 - Windows オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs.exe** コマンドを発行します。

イントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューターにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようになります。

- Web ページ `http://<host-name>:<port-number>/` を開きます (<host-name> はホスト名、 <port-number> は DB2 インフォメーション・センターを利用可能なポート番号)。

IBM Web サイトにある DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようになります。

- Web ページ `publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/` を開きます。

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 95 ページの『DB2 インフォメーション・センターでの希望する言語でのトピックの表示』
- 103 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 94 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 104 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 105 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 105 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> から利用できる DB2 インフォメーション・センターは、資料の新規追加または変更によって定期的に更新されます。さらに、更新された DB2 インフォメーション・センターをコンピューターまたはイントラネット・サーバーにダウンロードしてインストールできる場合もあります。DB2 インフォメーション・センターを更新しても、DB2 クライアント製品またはサーバー製品は更新されません。

前提条件:

インターネットに接続されたコンピューターへのアクセスが必要です。

手順:

DB2 インフォメーション・センターの更新をコンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストールするには、以下のようになります。

1. IBM の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターを開きます。
2. 「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」 ページの見出し「サービスおよびサポート」の「ダウンロード」セクションで、「**DB2 資料**」リンクをクリックします。
3. 最新のドキュメンテーション・イメージのレベルと、インストール済みのドキュメンテーション・レベルを比較して、DB2 インフォメーション・センターを更新する必要があるかどうかを確認します。「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」ページに、インストール済みのドキュメンテーションのレベルがリストされます。
4. より新しいバージョンの DB2 インフォメーション・センターが存在する場合、ご使用のオペレーティング・システムに対応する最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをダウンロードします。
5. 最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをインストールするには、Web ページの指示に従ってください。

関連概念:

- 84 ページの『DB2 インフォメーション・センターのインストールのシナリオ』

関連タスク:

- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 87 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (UNIX)』
- 90 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 インフォメーション・センターのインストール (Windows)』

DB2 インフォメーション・センターでの希望する言語でのトピックの表示

DB2 インフォメーション・センターでは、ブラウザの設定で指定されている言語でトピックが表示しようとします。その希望する言語にトピックが翻訳されていない場合は、DB2 インフォメーション・センターのトピックが英語で表示されます。

手順:

Internet Explorer ブラウザーの場合、希望する言語でトピックを表示するには、以下のようになります。

1. Internet Explorer の「ツール」→「インターネット オプション」→「言語...」ボタンをクリックします。「言語の優先順位」ウィンドウがオープンします。
2. 言語リストの先頭の項目として、希望する言語が指定されていることを確認します。
 - リストに新しい言語を追加するには、「追加...」ボタンをクリックします。

注: 言語を追加しても、希望する言語でトピックを表示するのに必要なフォントがコンピューターにあるとは限りません。

- リストの先頭に新しい言語を移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストの先頭に行くまで「上へ」ボタンをクリックします。
3. DB2 インフォメーション・センターを希望する言語で表示するには、ページをリフレッシュします。

Mozilla ブラウザーの場合、希望する言語でトピックを表示するには、以下のようになります。

1. Mozilla の「編集」→「設定」→「言語」ボタンをクリックします。「設定」ウィンドウに「言語」パネルが表示されます。
2. 言語リストの先頭の項目として、希望する言語が指定されていることを確認します。
 - リストに新しい言語を追加するには、「追加...」ボタンをクリックしてから、「言語を追加」ウィンドウで言語を選択します。
 - リストの先頭に新しい言語を移動するには、その言語を選択してから、その言語が言語リストに先頭に行くまで「上に移動」ボタンをクリックします。
3. DB2 インフォメーション・センターを希望する言語で表示するには、ページをリフレッシュします。

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

DB2 PDF 資料および印刷された資料

以下の表は、正式な資料名、資料番号、および PDF ファイル名を示しています。ハードコピー版の資料を注文するには、正式な資料名を知っておく必要があります。PDF ファイルを印刷するには、PDF ファイル名を知っておく必要があります。

DB2 資料は、以下のカテゴリーに分類されています。

- DB2 中核情報
- 管理情報
- アプリケーション開発情報
- ビジネス・インテリジェンス情報
- DB2 Connect 情報
- 入門情報
- チュートリアル情報
- オプション・コンポーネント情報
- リリース・ノート

以下の表は、DB2 ライブラリー内の各資料について、その資料のハードコピー版を注文したり、PDF 版を印刷または表示したりするのに必要な情報を示しています。DB2 ライブラリー内の各資料に関する詳細な説明については、www.ibm.com/shop/publications/order にある IBM Publications Center にアクセスしてください。

DB2 の基本情報

こうした資料の情報は、すべての DB2 ユーザーに基本的なもので、プログラマーおよびデータベース管理者にとって役立つ情報であるとともに、DB2 Connect、DB2 Warehouse Manager、または他の DB2 製品を使用するユーザーにとっても役立つ内容です。

表 6. DB2 の基本情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database コマンド・リファレンス」	SC88-9140	db2n0j81
「IBM DB2 Universal Database 用語集」	資料番号なし	db2t0j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 1 巻」	GC88-9152 (ハードコピーな し)	db2m1j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 2 巻」	GC88-9153 (ハードコピーな し)	db2m2j81
「IBM DB2 Universal Database 新機能」	SC88-9158	db2q0j81

管理情報

これらの資料の情報は、DB2 データベース、データウェアハウス、およびフェデレーテッド・システムを効果的に設計し、インプリメントし、保守するために必要なトピックを扱っています。

表7. 管理情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: プランニング」	SC88-9135	db2d1j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: インプリメンテー ション」	SC88-9133	db2d2j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: パフォーマンス」	SC88-9134	db2d3j81
「IBM DB2 Universal Database 管理 API リファレンス」	SC88-9136	db2b0j81
「IBM DB2 Universal Database データ移動ユーティリティー ガイドおよびリファレンス」	SC88-9142	db2dmj81
「IBM DB2 Universal Database データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス」	SC88-9143	db2haj81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター 管理ガイド」	SC88-9165	db2ddj81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第1巻」	SC88-9155	db2s1j81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第2巻」	SC88-9156	db2s2j81
「IBM DB2 Universal Database システム・モニター ガイドお よびリファレンス」	SC88-9157	db2f0j81

アプリケーション開発情報

これらの資料の情報は、DB2 Universal Database (DB2 UDB) のアプリケーション開発者またはプログラマーが特に興味を持つ内容です。サポートされるさまざまなプログラミング・インターフェース (組み込み SQL、ODBC、JDBC、SQLJ、CLI など) を使用して DB2 UDB にアクセスするのに必要な資料とともに、サポートされる言語およびコンパイラーについても紹介されています。また、DB2 インフォメーション・センターをご使用の場合には、サンプル・プログラムのソース・コードの HTML バージョンにアクセスすることもできます。

表8. アプリケーション開発情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および 実行」	SC88-9137	db2axj81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーショ ンのプログラミング」	SC88-9138	db2a1j81

表 8. アプリケーション開発情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド サーバー・アプリケーションの プログラミング」	SC88-9139	db2a2j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェ ース ガイドおよびリファレン ス 第 1 巻」	SC88-9159	db211j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェ ース ガイドおよびリファレン ス 第 2 巻」	SC88-9160	db212j81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター アプリケーション統合ガイド」	SC88-9166	db2adj81
「IBM DB2 Universal Database XML Extender 管理およびプロ グラミングのガイド」	SC88-9172	db2sxj81

ビジネス・インテリジェンス情報

これらの資料の情報は、さまざまなコンポーネントを使用して、DB2 Universal Database のデータウェアハウジング機能および分析機能を拡張する方法を説明しています。

表 9. ビジネス・インテリジェンス情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition イン フォメーション・カタログ・セ ンター 管理ガイド」	SC88-9167	db2dij81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition イン ストール・ガイド」	GC88-9164	db2idj81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition DB2 Warehouse Manager を使用時 の ETI ソリューション・コン バージョン・プログラムの管 理」	SC88-9894	iwhe1mstx80

DB2 Connect 情報

このカテゴリーの情報は、DB2 Connect Enterprise Edition または DB2 Connect Personal Edition を使用して、メインフレーム・サーバーおよびミッドレンジ・サーバー上のデータにアクセスする方法を説明しています。

表 10. DB2 Connect 情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM コネクティビティ 補足」	資料番号なし	db2h1j81
「IBM DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」	GC88-9145	db2c6j81
「IBM DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9146	db2c1j81
「IBM DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」	SC88-9147	db2c0j81

入門情報

このカテゴリの情報は、サーバー、クライアント、および他の DB2 製品をインストールして構成する場合に役立ちます。

表 11. 入門情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database DB2 クライアント機能 概説およびインストール」	GC88-9144 (ハードコピーなし)	db2itj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 サーバー機能 概説およびインストール」	GC88-9148	db2isj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9150	db2i1j81
「IBM DB2 Universal Database インストールおよび構成 補足」	GC88-9149 (ハードコピーなし)	db2iyj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Data Links Manager 概説およびインストール」	GC88-9141	db2z6j81

チュートリアル情報

チュートリアル情報は、DB2 機能を紹介し、さまざまなタスクを実行する方法を示します。

表 12. チュートリアル情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介」	資料番号なし	db2tuj81

表 12. チュートリアル情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド」	資料番号なし	db2taj81
「インフォメーション・カタログ・センター チュートリアル」	資料番号なし	db2ajj81
「Video Central for e-business チュートリアル」	資料番号なし	db2twj81
「Visual Explain チュートリアル」	資料番号なし	db2tvj81

オプション・コンポーネント情報

このカテゴリの情報は、DB2 のオプション・コンポーネントを使用する方法について説明しています。

表 13. オプション・コンポーネント情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Cube Views Guide and Reference」	SC18-7298	db2aax81
「IBM DB2 Query Patroller インストール、管理、使用法のガイド」	GC88-9154	db2dwj81
「IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」	SC88-9171	db2sbj81
「IBM DB2 Universal Database Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」	SC88-9169	db2z0x82
「DB2 Net Search Extender 管理およびユーザーズ・ガイド」	SH88-8546	N/A

注: この資料の HTML 版は、HTML ドキュメンテーション CD からインストールされません。

リリース・ノート

リリース・ノートは、ご使用の製品のリリースおよびフィックスパック・レベルに特有の追加情報を紹介します。また、リリース・ノートには、各リリース、アップデート、およびフィックスパックで組み込まれた資料上の更新の要約も含まれています。

表 14. リリース・ノート

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「DB2 リリース・ノート」	「注」を参照。	「注」を参照。
「DB2 インストール情報」	製品 CD-ROM でのみ参照可能。	使用できません。

注: リリース・ノートは以下の形式で入手できます。

- XHTML およびテキスト形式 (製品 CD 内)
- PDF 形式 (PDF ドキュメンテーション CD 内)

さらに、リリース・ノートの中で、『既知の問題と予備手段』および『リリース間の非互換性』に関する部分は DB2 インフォメーション・センターにも表示されます。

UNIX ベースのプラットフォームでテキスト形式でリリース・ノートを確認するには、Release.Notes ファイルを参照してください。このファイルは、DB2DIR/Readme/%L ディレクトリーに収録されています。%L はロケール名を表しています。DB2DIR は以下になります。

- AIX オペレーティング・システムの場合: /usr/opt/db2_08_01
- その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合: /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 81 ページの『DB2 資料およびヘルプ』

関連タスク:

- 101 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』
- 102 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 103 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』

PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法

DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている DB2 資料を印刷することができます。Adobe Acrobat Reader を使用すれば、資料全体または特定のページを印刷できます。

前提条件:

Adobe Acrobat Reader がインストールされていることを確認してください。Adobe Acrobat Reader をインストールする必要がある場合、Adobe Web サイト (www.adobe.com) から入手できます。

手順:

PDF ファイルから DB2 資料を印刷するには以下のようにします。

1. DB2 PDF ドキュメンテーション CD をドライブに挿入します。UNIX オペレーティング・システムの場合、DB2 PDF ドキュメンテーション CD をマウン

トします。UNIX オペレーティング・システムで CD をマウントする方法については、「概説およびインストール」を参照してください。

2. index.htm を開きます。ブラウザ・ウィンドウにファイルが開きます。
3. 参照したい PDF のタイトルをクリックします。Acrobat Reader で PDF が開きます。
4. 「ファイル」 → 「印刷」を選択して、所要の資料の任意の部分を印刷します。

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『HP-UX 上での CD-ROM のマウント』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 102 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『CD-ROM のマウント (Solaris)』

関連資料:

- 95 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 の印刷資料の注文方法

ハードコピー版の資料を望む場合には、以下のいずれかの方法で注文できます。

印刷資料の注文方法:

一部の国または地域では、印刷された資料を注文することもできます。お客様がお住まいの国または地域でこのサービスが利用可能かどうかを確認するには、お住まいの国または地域の IBM Publications Web サイトをご覧ください。資料のご注文が可能な場合、以下のようにすることができます。

- 正規の IBM 製品販売業者または営業担当員に連絡してください。お客様がお住まいの地域の IBM 担当員の情報については、お手数ですが IBM の Web サイト (www.ibm.com/planetwide) の IBM Worldwide Directory of Contacts で確認してください。
- IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。なお、IBM Publications Center から資料を注文できない国もあります。

DB2 製品がご利用可能になった時点で、印刷された資料は DB2 PDF ドキュメンテーション CD にある PDF 形式の資料と同じものです。さらに、DB2 インフォメーション・センター CD に収録されている印刷された資料の内容もまた、これらと同じです。ただし、DB2 インフォメーション・センター CD には、PDF 資料にな

い追加情報も含まれます (たとえば、SQL 管理作業や HTML サンプル)。DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている資料の中には、ハードコピーとしてご注文できない資料もあります。

注: DB2 インフォメーション・センターは、PDF またはハードコピー の資料よりも頻繁に更新されます。ドキュメンテーションの更新が入手可能になった時点でインストールするか、DB2 インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) を参照して最新の情報を入手してください。

関連タスク:

- 101 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』

関連資料:

- 95 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す

コンテキスト・ヘルプは、特定のウィンドウ、ノートブック、ウィザード、またはアドバイザーに関連したタスクまたはコントロールの情報を提供します。コンテキスト・ヘルプは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースのある DB2 管理ツールおよび開発ツールから利用できます。コンテキスト・ヘルプには、以下の 2 種類があります。

- それぞれのウィンドウまたはノートブックにある「ヘルプ」ボタンからアクセス可能なヘルプ
- infopop (ポップアップ情報ウィンドウ)。これは、マウス・カーソルを特定のフィールドまたはコントロール上に置いたとき、またはウィンドウ、ノートブック、ウィザード、アドバイザー内でフィールドまたはコントロールを選択して F1 を押すと表示されます。

「ヘルプ」ボタンを押すと、概説、前提条件、およびタスク情報が表示されます。infopop は、それぞれのフィールドおよびコントロールについて説明します。

手順:

コンテキスト・ヘルプを呼び出すには、以下のようになります。

- ウィンドウおよびノートブックのヘルプを表示するには、いずれかの DB2 ツールを開始して、任意のウィンドウまたはノートブックを開きます。ウィンドウまたはノートブックの右下隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックして、コンテキスト・ヘルプを呼び出します。

また、それぞれの DB2 ツール・センターの上部にある「ヘルプ」メニュー項目からコンテキスト・ヘルプにアクセスすることもできます。

ウィザードおよびアドバイザーでは、最初のページの「タスクの概要」リンクをクリックすると、コンテキスト・ヘルプを表示できます。

- ウィンドウまたはノートブック上の各コントロールの infopop ヘルプを表示するには、コントロールをクリックしてから、**F1** を押します。コントロールの詳細情報を示すポップアップ情報が、黄色いウィンドウに表示されます。

注: フィールドまたはコントロールにマウス・カーソルを置いておくだけで infopops が表示されるようにするには、「ツール設定」ノートブックの「文書 (Documentation)」ページの「infopops の自動表示」チェック・ボックスを選択します。

infopop に似た別のコンテキスト・ヘルプに、診断ポップアップ情報があります。これにはデータ入力規則が示されます。診断ポップアップ情報は、無効または不十分なデータが入力されたとき、紫色のウィンドウに表示されます。診断ポップアップ情報は、以下に関して表示されます。

- 必須フィールド。
- 日付フィールドのように、正確なフォーマットを必要とするデータのフィールド。

関連タスク:

- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 104 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 105 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 105 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 UDB ヘルプの使用法: Common GUI help』
- 『DB2 コンテキスト・ヘルプと資料へのアクセスを設定する: Common GUI help』

コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す

メッセージ・ヘルプは、メッセージが出された原因と、エラーへの応答として実行すべきアクションを説明します。

手順:

メッセージ・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? XXXnnnnn
```

ここで、*XXXnnnnn* は有効なメッセージ ID を表します。

たとえば、? SQL30081 と入力すると、メッセージ SQL30081 に関するヘルプを表示します。

関連概念:

- 「メッセージ・リファレンス 第 1 巻」の『メッセージの概要』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す

コマンド・ヘルプは、コマンド行プロセッサでのコマンドの構文を説明します。

手順:

コマンド・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? command
```

ここで *command* はキーワードまたはコマンド全体を表します。

たとえば、? catalog と入力すると、すべての CATALOG コマンドに関するヘルプが表示され、? catalog database と入力すると、CATALOG DATABASE コマンドのヘルプだけが表示されます。

関連タスク:

- 103 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 104 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 105 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す

DB2 Universal Database は、SQL ステートメントの結果の原因となったと考えられる条件の SQLSTATE 値を戻します。SQLSTATE ヘルプは、SQL 状態および SQL 状態クラス・コードの意味を説明します。

手順:

SQL 状態ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? sqlstate または ? class code
```

ここで、*sqlstate* は有効な 5 桁の SQL 状態を、*class code* は SQL 状態の最初の 2 桁を表します。

たとえば、? 08003 を指定すると SQL 状態 08003 のヘルプが表示され、? 08 を指定するとクラス・コード 08 のヘルプが表示されます。

関連タスク:

- 92 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 104 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 105 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』

DB2 チュートリアル

DB2[®] チュートリアルは、DB2 Universal Database のさまざまな機能について学習するのを支援します。このチュートリアルでは、アプリケーションの開発、SQL 照会のパフォーマンス調整、データウェアハウスの処理、メタデータの管理、および DB2 を使用した Web サービスの開発の各分野で、段階的なレッスンが用意されています。

はじめに:

インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) から、このチュートリアルの XHTML 版を表示できます。

チュートリアルの中で、サンプル・データまたはサンプル・コードを使用する場合があります。個々のタスクの前提条件については、それぞれのチュートリアルを参照してください。

DB2 Universal Database チュートリアル:

以下に示すチュートリアルのタイトルをクリックすると、そのチュートリアルを表示できます。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介
データウェアハウス・センターを使用して簡単なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド
データウェアハウス・センターを使用して高度なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

インフォメーション・カタログ・センター・チュートリアル
インフォメーション・カタログを作成および管理して、インフォメーション・カタログ・センターを使用してメタデータを配置し使用します。

Visual Explain チュートリアル
Visual Explain を使用して、パフォーマンスを向上させるために SQL ステートメントを分析し、最適化し、調整します。

DB2 トラブルシューティング情報

DB2[®] 製品を使用する際に役立つ、トラブルシューティングおよび問題判別に関する広範囲な情報を利用できます。

DB2 ドキュメンテーション

トラブルシューティング情報は、DB2 インフォメーション・センター、および DB2 ライブラリーに含まれる PDF 資料の中でご利用いただけます。DB2 インフォメーション・センターで、(ブラウザー・ウィンドウの左側の) ナビゲーション・ツリーの「サポートおよびトラブルシューティング (Support and troubleshooting)」ブランチを参照すると、DB2 トラブルシューティング・ドキュメンテーションの詳細なリストが見つかります。

DB2 Technical Support の Web サイト

現在問題が発生していて、考えられる原因とソリューションを検索したい場合は、DB2 Technical Support の Web サイトを参照してください。

Technical Support サイトには、最新の DB2 出版物、TechNotes、プログラム診断依頼書 (APAR)、フィックスパック、DB2 内部エラー・コードの最新リスト、その他のリソースが用意されています。この知識ベースを活用して、問題に対する有効なソリューションを探し出すことができます。

DB2 Technical Support の Web サイト

(<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) にアクセスしてください。

DB2 Problem Determination Tutorial Series

DB2 製品で作業中に直面するかもしれない問題を素早く識別し、解決する方法に関する情報を見つけるには、DB2 Problem Determination Tutorial Series の Web サイトを参照してください。あるチュートリアルでは、使用可能な DB2 問題判別機能およびツールを紹介し、それらをいつ使用すべきかを判断する助けを与えます。別のチュートリアルは、『データベース・エンジン問題判別 (Database Engine Problem Determination)』、『パフォーマンス問題判別 (Performance Problem Determination)』、『アプリケーション問題判別 (Application Problem Determination)』などの関連トピックを扱っています。

DB2 Technical Support

(<http://www.ibm.com/software/data/support/pdm/db2tutorials.html>) には、DB2 問題判別チュートリアルがすべて揃っています。

関連概念:

- 82 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- *Troubleshooting Guide* の『Introduction to Problem Determination - DB2 テクニカル・サポートのチュートリアル』

アクセス支援

アクセス支援機能は、身体に障害のある (身体動作が制限されている、視力が弱いなど) ユーザーがソフトウェア製品を十分活用できるように支援します。DB2® バージョン 8 製品に備わっている主なアクセス支援機能は、以下のとおりです。

- すべての DB2 機能は、マウスの代わりにキーボードを使ってナビゲーションできます。詳細については、108 ページの『キーボードによる入力およびナビゲーション』を参照してください。
- DB2 ユーザー・インターフェースのフォント・サイズおよび色をカスタマイズすることができます。詳細については、108 ページの『アクセスしやすい表示』を参照してください。
- DB2 製品は、Java™ Accessibility API を使用するアクセス支援アプリケーションをサポートします。詳細については、108 ページの『支援テクノロジーとの互換性』を参照してください。
- DB2 資料は、アクセスしやすい形式で提供されています。詳細については、109 ページの『アクセスしやすい資料』を参照してください。

キーボードによる入力およびナビゲーション

キーボード入力

キーボードだけを使用して DB2 ツールを操作できます。マウスを使って実行できる操作は、キーまたはキーの組み合わせによっても実行できます。標準のオペレーティング・システム・キー・ストロークを使用して、標準のオペレーティング・システム操作を実行できます。

キーまたはキーの組み合わせによって操作を実行する方法について、詳しくは キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・ナビゲーション

キーまたはキーの組み合わせを使用して、DB2 ツールのユーザー・インターフェースをナビゲートできます。

キーまたはキーの組み合わせによって DB2 ツールをナビゲートする方法の詳細については、キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・フォーカス

UNIX[®] オペレーティング・システムでは、アクティブ・ウィンドウの中で、キー・ストロークによって操作できる領域が強調表示されます。

アクセスしやすい表示

DB2 ツールには、視力の弱いユーザー、その他の視力障害をもつユーザーのためにアクセシビリティを向上させる機能が備わっています。これらのアクセシビリティ拡張機能には、フォント・プロパティのカスタマイズを可能にする機能も含まれています。

フォントの設定

「ツール設定」ノートブックを使用して、メニューおよびダイアログ・ウィンドウに使用されるテキストの色、サイズ、およびフォントを選択できます。

フォント設定に関する詳細情報は、メニューおよびテキストのフォントを変更する: Common GUI help を参照してください。

色に依存しない

本製品のすべての機能を使用するために、ユーザーは必ずしも色を識別する必要はありません。

支援テクノロジーとの互換性

DB2 ツールのインターフェースは、Java Accessibility API をサポートします。これによって、スクリーン・リーダーその他の支援テクノロジーを DB2 製品で利用できるようになります。

アクセスしやすい資料

DB2 形式は、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で提供されています。XHTML により、ご使用のブラウザに設定されている表示設定に従って資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーや他の支援テクノロジーを使用することもできます。

シンタックス・ダイアグラムはドット 10 進形式で提供されます。この形式は、スクリーン・リーダーを使用してオンライン・ドキュメンテーションにアクセスする場合にのみ使用できます。

関連概念:

- 109 ページの『ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム』

ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム

スクリーン・リーダーを使用してインフォメーション・センターを利用するユーザーのために、シンタックス・ダイアグラムがドット 10 進形式で提供されます。

ドット 10 進形式では、各シンタックス・エレメントは別々の行に書き込まれます。複数のシンタックス・エレメントが常に同時に存在する (または常に同時に不在の) 場合、単一のコンパウンド・シンタックス・エレメントとみなせるので同一行に表示できます。

各行は、ドット 10 進数で開始します。たとえば、3 または 3.1 ないしは 3.1.1 です。こうした数を適切に聞き取るには、スクリーン・リーダーが句読点を読み取るように設定されていることを確認してください。同じドット 10 進数を持つすべてのシンタックス・エレメント (たとえば、3.1 という数値を持つすべてのシンタックス・エレメント) は、相互に排他的な代替エレメントです。3.1 USERID および 3.1 SYSTEMID という行を聞き取る場合、シンタックスには両方ではなく USERID または SYSTEMID のどちらかが含まれることが分かります。

ドット 10 進レベルは、ネストのレベルを表示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメントの後に、一連のドット 10 進数 3.1 のシンタックス・エレメントが続きます。3.1 の番号が付されたシンタックス・エレメントすべては、番号 3 の付されたシンタックス・エレメントに従属します。

シンタックス・エレメントに関する情報を追加するため、ドット 10 進数の次に特定のワードおよびシンボルが使用されます。時折、こうしたワードおよびシンボルはエレメントの最初に表示される場合もあります。簡単に識別するため、ワードやシンボルがシンタックス・エレメントの一部である場合には、円記号 (¥) 文字が先頭に付きます。* シンボルはドット 10 進数の次に使用でき、シンタックス・エレメントが反復することを示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメント *FILE は、3 ¥* FILE という形式になります。3* FILE という形式は、シンタックス・エレメント FILE が反復されることを示します。3* ¥* FILE という形式は、シンタックス・エレメント * FILE が反復されることを示します。

シンタックス・エレメントのストリングを分離するのに使用されるコンマなどの文字は、シンタックス内の分離する項目の直前に表示されます。こうした文字は、それぞれの項目と同一行に表示するか、同じドット 10 進数を持つ関連する項目のあ

別の行に表示できます。またその行には、シンタックス・エレメントに関する情報を提供する別のシンボルを表示することも可能です。たとえば、複数の LASTRUN および DELETE シンタックス・エレメントを使用している場合には、5.1*、5.1 LASTRUN、および 5.1 DELETE という行は、エレメントをコンマで区切る必要があります。区切り文字が指定されないと、各シンタックス・エレメントを区切るのにブランクが使用されると想定されます。

シンタックス・エレメントの前に % シンボルが付く場合、他の箇所で定義されている参照であることを示します。% シンボルの後のストリングは、リテラルではなくシンタックス・フラグメントの名前です。たとえば、2.1 %OP1 という行は別のシンタックス・フラグメント OP1 を参照すべきことを意味します。

以下のワードおよびシンボルが、ドット 10 進数の次に使用されます。

- ? は、オプションのシンタックス・エレメントであることを表します。? シンボルが後に続くドット 10 進数は、対応するドット 10 進数のシンタックス・エレメント、および任意の従属のシンタックス・エレメントがオプションであることを示します。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが 1 つしかない場合、? シンボルはそのシンタックス・エレメントと同じ行に表示されます (たとえば、5? NOTIFY)。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが複数ある場合、? シンボルだけで行に表示され、その後にはオプションのシンタックス・エレメントが続きます。たとえば、「5 ?, 5 NOTIFY、および 5 UPDATE」という行を聞き取る場合、シンタックス・エレメント NOTIFY および UPDATE がオプションである、つまりそのいずれかを選択でき、どちらも選択しないこともできることが分かります。? シンボルは、線路型ダイアグラムのバイパス線に相当します。
- ! は、デフォルトのシンタックス・エレメントであることを表します。! シンボルおよびシンタックス・エレメントが後に続くドット 10 進数は、そのシンタックス・エレメントが、同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントすべてのデフォルト・オプションであることを示します。同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントのうち 1 つだけに、! シンボルを指定できません。たとえば、「2? FILE、2.1! (KEEP)、および 2.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、FILE キーワードのデフォルト・オプションは (KEEP) になります。この例では、FILE キーワードを含めてもオプションを指定しない場合には、デフォルト・オプション KEEP が適用されます。デフォルト・オプションは、次に高位のドット 10 進数にも適用されます。この例の場合、FILE キーワードが省略されると、デフォルトの FILE(KEEP) が使用されます。しかし、「2? FILE、2.1、2.1.1! (KEEP)、および 2.1.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、デフォルト・オプション KEEP は次に高位のドット 10 進数 2.1 (関連キーワードを持っていない) にのみ適用され、2? FILE には適用されません。キーワード FILE が省略されると、どれも使用されません。
- * は、0 回以上反復できるシンタックス・エレメントを示します。* シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントが 0 回以上使用できること、つまりオプションであり、なおかつ反復できることを表します。たとえば、5.1* データ域という行を聞き取る場合、1 つまたは複数のデータ域を含めるか、またはデータ域を全く含めないことが可能です。「3*、3 HOST、および 3 STATE」という行を聞き取る場合、HOST、STATE をどちらか一方または両方同時に含めるか、どちらも含めないことができます。

|

| **注:**

- | 1. ドット 10 進数の後にアスタリスク (*) が付き、ドット 10 進数の付いた項目
- | が 1 つしかない場合には、同じ項目を複数回反復できます。
- | 2. ドット 10 進数の後にアスタリスクが付き、ドット 10 進数の付いた項目が複数
- | ある場合、リストから複数の項目を使用できますが、各項目を複数回使用する
- | ことはできません。前述の例では、HOST STATE と書くことはできます
- | が、HOST HOST とは書けません。
- | 3. * シンボルは、線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当し
- | ます。
- | • + は、1 回以上含める必要のあるシンタックス・エレメントであることを示しま
- | す。+ シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントを
- | 1 回以上含める必要があること、つまり少なくとも 1 回は含める必要があり、反
- | 復できることを表します。たとえば、「6.1+ データ域」という行を聞き取る場
- | 合、データ域を少なくとも 1 回は含めなければなりません。「2+, 2 HOST、お
- | よび 2 STATE」という行を聞き取る場合には、HOST、STATE、またはその両
- | 方を含める必要があります。* シンボルと同様に、+ シンボルは、ドット 10 進
- | 数の付いた項目が 1 つしかない場合に限り、その特定の項目のみを反復できま
- | す。* シンボルと同様、+ シンボルは線路型シンタックス・ダイアグラムのル
- | ープバック線に相当します。

| **関連概念:**

- | • 107 ページの『アクセス支援』

| **関連タスク:**

- | • 『キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help』

| **関連資料:**

- | • 「SQL リファレンス 第 2 巻」の『構文図の見方』

| **DB2 Universal Database 製品の共通基準認証**

| DB2 Universal Database は、Common Criteria の評価検定レベル 4 (EAL4) で認証

| の評価を受けています。Common Criteria の詳細については、以下の Common

| Criteria の Web サイトを参照してください。 <http://niap.nist.gov/cc-scheme/>

付録 C. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	iSeries
AISPO	LAN Distance
AIX	MVS
AIXwindows	MVS/ESA
AnyNet	MVS/XA
APPN	Net.Data
AS/400	NetView
BookManager	OS/390
C Set++	OS/400
C/370	PowerPC
CICS	pSeries
Database 2	QBIC
DataHub	QMF
DataJoiner	RACF
DataPropagator	RISC System/6000
DataRefresher	RS/6000
DB2	S/370
DB2 Connect	SP
DB2 Extenders	SQL/400
DB2 OLAP Server	SQL/DS
DB2 Information Integrator	System/370
DB2 Query Patroller	System/390
DB2 Universal Database	SystemView
Distributed Relational Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
	zSeries

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ
機能 107
小数点付き 10 進数構文図 109
アプリケーション開発
DB2 Application Development Client の使用 10
Net.Data または JDBC による 58
ODBC の使用 58
印刷
PDF ファイル 101
印刷版ブックの注文 102
インストール
インフォメーション・センター 84, 87, 90
DB2 Connect Personal Edition 11
インターフェース言語 76
変更
UNIX 76
Windows 75
インフォメーション・センター
インストール 84, 87, 90
インポート
プロファイル 72
インポート機能
クライアント・プロファイルの構成 70
エクスポート
プロファイル 72
エクスポート機能
クライアント・プロファイルの作成 69
オンライン
オンライン・ヘルプへのアクセス 103

[カ行]

各国語サポート (NLS)
文字データの変換 78
キーボード・ショートカット
サポート 107
クライアント・プロファイル
インポート機能 68
インポート機能を使用した構成 70

クライアント・プロファイル (続き)
エクスポート機能 68
エクスポート機能を使用した作成 69
概要 68
言語
両方向サポート 78
言語 ID
DB2 セットアップ・ウィザード 77
コード・ページ
サポートされている 76
変換
例外 78
更新
HTML 文書 94
構成
接続
構成アシスタントを使用 53
DB2 Connect Personal Edition 11
構成アシスタント
ディスクバリー機能 56, 66
構成アシスタント (CA)
クライアント・プロファイルの作成 69
構成
クライアント・プロファイル 70
データベース接続、一般 54, 64
ホスト・データベース・サーバーへの接続 53
iSeries データベース・サーバーへの接続 53
テスト
データベース接続 58, 68
コマンド・ヘルプ
呼び出し 105

[サ行]

手動でのデータベースの追加
構成アシスタント (CA) 54, 64
小数点付き 10 進数構文図 109
身体障害 107
製品のパッケージ 3
セキュリティ
ユーザー・グループ 33
接続
概要 9
構成アシスタント 9
通信サーバーを経由した DRDA ホストとの接続 38
プロファイルを使用したデータベース接続 55, 65

接続 (続き)
ホストまたは iSeries データベースへの直接接続 6

[タ行]

チュートリアル 106
トラブルシューティングおよび問題判別 106
注文、印刷版ブック 102
追加
データベース
手動 54, 64
通信プロトコル
DRDA ホスト・アクセス構成 38
データ
変換
文字 78
データベース
構成 58, 68
データベース接続
構成
構成アシスタント (CA) の使用 54, 64
ディスクバリーの使用 56, 66
プロファイルの使用 55, 65
テスト 58, 68
ディスクバリー機能
データベース接続の構成 56, 66
ディレクトリー・スキーマ
拡張
Windows 2000 および Windows .NET 17

テスト
データベース接続 58, 68
テリトリー・コード
ページ・サポート 78
トラブルシューティング
オンライン情報 106
チュートリアル 106

[ハ行]

プロファイル
インポート 72
エクスポート 72
構成
データベース接続 55, 65
文書
表示 92

ヘルプ
コマンド用
呼び出し 105
表示 92, 95
メッセージ用
呼び出し 104
SQL ステートメント用
呼び出し 105

[マ行]

メッセージ・ヘルプ
呼び出し 104
問題判別
オンライン情報 106
チュートリアル 106

[ヤ行]

ユーザー・アカウント
インストールに必要な 17
ユーザー・グループ
セキュリティ 33
呼び出し
コマンド・ヘルプ 105
メッセージ・ヘルプ 104
SQL ステートメント・ヘルプ 105

[ラ行]

両方向 CCSID サポート
言語サポート 78
ロケール
サポートされている 76

C

CCSID (coded character set identifier)
双方向言語 78

D

DB2
インターフェース言語 76
コード・ページ 76
ロケール 76
DB2 Application Development Client
概要 10
DB2 Connect
接続のための DB2 for VSE & VM の
準備 49
非管理者によるインストール 23
DB2 Connect Enterprise Edition
製品説明 3

DB2 Connect Personal Edition

インストール
概要 11
Linux 26
Windows 21
インストール要件
Windows 15
構成 11
製品説明 3

DB2 Universal Database for OS/390 and
z/OS

システム表の更新 41

DB2 インフォメーション・センター 82

呼び出し 92

DB2 クライアント

概要 9

DB2 資料

PDF ファイルの印刷 101

DB2 セットアップ・ウィザード

言語 ID 77

DB2 チュートリアル 106

H

HTML 文書
更新 94

I

iSeries

DB2 Connect の構成 47

DB2 Connect のための DB2 の構成
47

DSPNETA 47

DSPRDBDIRE 47

WRKLIND 47

L

Linux

インストール

DB2 Connect Personal Edition 26

N

NLS (各国語サポート)
文字データの変換 78

O

OS/390

DB2 Universal Database の構成 41

S

SQL ステートメント・ヘルプ
呼び出し 105

T

TCP/IP

構成

ホスト接続 6, 38

DB2 UDB for OS/390 and z/OS の構
成 37

U

UNIX

DB2 インターフェース言語の変更 76

V

VSE and VM への接続

DB2 Connect からの DB2 の準備 49

VTAM

サンプル定義 42

サンプルの PU および LU 定義 42

サンプルのログオン・モード表項目
42

DB2 Connect のための OS/390 または
z/OS の準備 37

W

Windows

インストール

DB2 Connect Personal Edition 21

DB2 Connect、非管理者によるイン
ストール 23

インストール要件

DB2 Connect Personal Edition 15

ディレクトリー・スキーマの拡張

Windows 2000 および Windows
Server 2003 17

Windows Server 2003 17

DB2 インターフェース言語の変更 75

DB2 のインストール

ユーザー・アカウント 17

Z

z/OS

DB2 Universal Database の構成 41

IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb> から入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、製品のダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、IBM Worldwide ページ (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。



部品番号: CT2TSJA

Printed in Japan.

GC88-9146-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12

(1P) P/N: CT2TSJA



Spine information:



IBM® DB2 Connect™

DB2 Connect Personal Edition
概説およびインストール

バージョン 8.2